

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No.99



2023年12月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

第14回シニアバスケットボール交歓大会 In YOYOGI

期日：2023年11月15日(水) - 16日(木) 2日間

場所：国立代々木競技場第2体育館

<参加チーム>



長野クラブ



MYC



駒馬



岩手マスターズ



Tigre Azzurro



横浜ビーシーガールズ



STARS OF STARS



セブンブラザーズ

目 次

- 令和5年度活動中間報告 理事長 渡邊 誠 . . . 2
—通常総会の報告と現状及び今後の活動報告—
- FIBA ワールドカップ 2023 総合成績 4
優勝はドイツ：パリ・オリンピックの推薦出場7チームが決まる
- FIBAワールドカップ 2023 日本の活躍 9
「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表はパリ・オリンピック出場権獲得
- 第19回アジア競技大会（杭州） 14
「AKATSUKI JAPAN」女子日本代表は、中国に惜敗し銀メダル
- 【人物抄】 大庭 哲夫 歴史部 . . . 17
—日本バスケット界の発展に多大な貢献—
- 会員だより 須田 武志 . . . 21
嘘のような、本当にあった話
- 会員だより 高橋 旭 . . . 25
第14回シニアバスケットボール交歓大会 2023 In Yoyogi
- 北海道バスケットボールのあけぼの 普及部 . . . 27
—北海道バスケットボール協会の設立—
- 全国各地シニア大会観戦記 普及部 . . . 29
 - ◆第1回エール杯岡山大会
 - ◆ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会・函館
- 高校籠球ふるさと記（北海道編） 事務局 . . . 31
- 事務局だより 事務局 . . . 40
- プラザ こぼればなし 41

令和5年度活動中間報告

—通常総会の報告と現状及び今後の活動報告—

理事長 渡邊 誠

【通常総会の報告】 —書面決議（同封ハガキの返信による）—

令和5年度通常総会について、定款27条第1項に基づき書面による開催・審議とし、「令和5年度（2023年度）通常総会資料」をバスケットボールプラザ98号に掲載し、下記議案についてハガキによる賛否回答を会員へ依頼しました。

- (1) 第1号議案 令和4年度事業活動報告
- (2) 第2号議案 令和4年度事業会計収支決算報告
- (3) 第3号議案 令和4年度監査報告
- (4) 第4号議案 令和5年度事業活動計画（案）
- (5) 第5号議案 令和5年度事業会計収支予算（案）

上記議案をご審議いただき、すべての項目について、会員数141名に対して賛成81件を頂きました。そのご承認に基づき、令和5年度の計画、予算などを実行いたします。

また、「事業報告書など」を東京都管理法課に提出し、すでに収受されたことを報告いたします。

[令和5年度活動報告]

- 4月7日 関東ゴールデンシニアバスケットボール連盟打合せ出席
- 4月22日・23日 シニアバスケットボール大会 in 白子
70才以上シニア男子大会・8チーム参加、千葉県長生郡白子町にて開催
- 5月20日 女子のシニア大会の企画について、港区スポーツセンターで小林さん、柳沢さんにご意見を聞きました。
- 6月23日 監査・理事会開催 「令和5年度通常総会資料」（案）を審議・承認
- 7月5日 「京都バスケットボール協会100周年史」作成協力 児玉氏来訪
- 7月18日 プラザ98号発行「令和5年度通常総会資料」（案）掲載し、「通常総会」の開催（はがきによる書面決議）
- 8月9～15日 事務所夏季休暇
- 8月29日 「明治大学」「中央大学」バスケットボール部100周年記念史の作成協力
- 9月 レンタル倉庫借用/事務所にある保管資料の移動
- 9月2・3日 第1回エール杯全国スーパーゴールデン・プラチナシニアバスケットボール岡山大会（65歳以上と70歳以上のシニア大会）参加
- 9月30日 第29回 函館大会（函館・札幌・帯広・旭川地区などのシニアチームの全道大会）参加

- 10月17日 理事会（電磁的方法による）事務所移転に係る審議
10月18日 代々木第二体育館大会開催の事前打ち合わせ
 渋谷センター街様 広告依頼
10月26日 「社会価値経営」フォーラム（主催 企業価値協会） 出席
11月14日 新事務所移転に係る正式契約
11月15・16日 「シニアバスケットボール大会 in 代々木」開催
11月23日 事務所引っ越し

- ・「バスケットボールプラザ」の編集については、多くの方の協力のもと内容の充実
に努力しています。「高校籠球ふるさと記」「人物抄」「先人の軌跡」などの内容に
ついて、振興会会員以外の方に広くご意見をお聞きし参考にしています。
- ・都道府県協会・大学など、創立100周年を迎えて記念誌を作成する団体が増えて
います。振興会は保管している資料を活用し協力しています。
- ・シニア世代の大会が全国で開催されております。振興会では、各大会の要綱を参考
に、代々木大会、白子大会の開催要綱も検討します。
- ・中小企業のための「社会価値経営」フォーラムに参加しました。振興会のバスケ
ット界における「社会価値」を考え、多くの機会に振興会の活動を知っていただくこ
とが必要であると考えています。

[今後の活動予定]

- 12月4日 臨時総会・講演会・懇親会 於コンフォート水道橋
12月5日 新事務所活動開始
12月27日～ 冬季休暇
令和6年1月9日 仕事始め
1月中旬以降 令和6年度（2024年度）通常総会資料作成
 （活動報告・決算報告・予算作成・活動計画・役員改選）
4月以降（新年度） ・監査・理事会の招集
 ・「バスケットボールプラザ100号」の発行
 ・令和6年度（2024年度）通常総会の開催

以上

◆ お知らせ

事務所移転に伴い、住所、電話/FAX番号が以下の通りに変更されました。
ご注意ください。

<新住所> 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-20 新協ビル 304号室

<新電話/FAX番号> (03) 5276-5801

FIBA ワールドカップ 2023 総合成績

優勝はドイツ：パリ・オリンピックの推薦出場7チームが決まる

[編集部]

FIBAワールドカップ 2023 は4月29日にグループフェーズの8グループA～Hの編成が下記のように決まり、各グループによる「1次ラウンド」が8月25日から30日まで開催された。各グループ上位2チームによる4グループI～Lの計16チームの2次ラウンドは8月31日から9月3日まで、グループ別に同一の開催場所で戦った。

4グループI～Lの上位2チームによるファイナルフェーズは9月5日から10日までフィリピン・マニラで開催された。

各チームの勝敗と成績順位とを下記する。

グループフェーズのグループ分けと開催場所

開催国 フィリピン			開催国 フィリピン			開催国 日本			開催国 インドネシア		
開催場所 MANILA			開催場所 MANILA			開催場所 OKINAWA			開催場所 JAKARTA		
ARANETA COLICEUM			MOA ARENA			OKINAWA ARENA			INDONESIA ARENA		
グループ A			グループ C			グループ E			グループ G		
1	ANG	41	1	USA	2位	1	GER	11	1	IRI	22
2	DOM	23	2	JOR	33	2	FIN	24	2	ESP	1位
3	PHI	40	3	GRE	9位	3	AUS	3位	3	CIV	42
4	ITA	10	4	NZL	26	4	JPN	36	4	BRA	13
グループ B			グループ D			グループ F			グループ H		
1	SSD	62	1	EGY	55	1	SLO	7位	1	CAN	15
2	SRB	6位	2	MEX	31	2	CPV	64	2	LAT	29
3	CHN	27	3	MNE	18	3	GEO	32	3	LBN	43
4	PUR	20	4	LTU	8位	4	VEN	17	4	FRA	5位

上表のチーム略号右隣は2023年2月27日のFIBA世界ランキング値

略号に対応するチーム名を下記に示す。

グループ A

ANG	アンゴラ
DOM	ドミニカ共和国
PHI	フィリピン
ITA	イタリア

グループ C

USA	アメリカ
JOR	ヨルダン
GRE	ギリシャ
NZL	ニュージーランド

グループ E

GER	ドイツ
FIN	フィンランド
AUS	オーストラリア
JPN	日本

グループ G

IRI	イラン
ESP	スペイン
CIV	コートジボワール
BRA	ブラジル

グループ B

SSD	南スーダン
SRB	セルビア
CHN	中国
PUR	プエルトリコ

グループ D

EGY	エジプト
MEX	メキシコ
MNE	モンテネグロ
LTU	リトアニア

グループ F

SLO	スロベニア
CPV	カーボベルデ
GEO	ジョージア
VEN	ベネズエラ

グループ H

CAN	カナダ
LAT	ラトビア
LBN	レバノン
FRA	フランス

グループフェーズ・1次ラウンド（8月25日～8月30日）の結果

グループ A				グループ C				グループ E				グループ G			
順位	チーム	勝	負												
A1	DOM	3	0	C1	USA	3	0	E1	GER	3	0	G1	ESP	3	0
A2	ITA	2	1	C2	GRE	2	1	E2	AUS	2	1	G2	BRA	2	1
A3	ANG	1	2	C3	NZL	1	2	E3	JPN	1	2	G3	CIV	1	2
A4	PHI	0	3	C4	JOR	0	3	E4	FIN	0	3	G4	IRI	0	3

グループ B				グループ D				グループ F				グループ H			
順位	チーム	勝	負												
B1	SRB	3	0	D1	LTU	3	0	F1	SLO	3	0	H1	CAN	3	0
B2	PUR	2	1	D2	MNE	2	1	F2	GEO	2	1	H2	LAT	2	1
B3	SSD	1	2	D3	EGY	1	2	F3	CPV	1	2	H3	FRA	1	2
B4	CHN	0	3	D4	MEX	0	3	F4	VEN	0	3	H4	LBN	0	3

各グループ内でのリーグ戦結果を示す。各グループの上位2チームが2次ラウンドへ進み、下位2チームは13位以下の順位決定戦に臨む。

グループフェーズ・2次ラウンド（8月31日～9月3日）の結果

グループ I (A/B上位)				グループ J (C/D上位)				グループ K (E/F上位)				グループ L (G/H上位)			
順位	チーム	勝	負												
I1	ITA	4	1	J1	LTU	5	0	K1	GER	5	0	L1	CAN	4	1
I2	SRB	4	1	J2	USA	4	1	K2	SLO	4	1	L2	LAT	4	1
I3	PUR	3	2	J3	MNE	3	2	K3	AUS	3	2	L3	ESP	3	2
I4	DOM	3	2	J4	GRE	2	3	K4	GEO	2	3	L4	BRA	3	2

1次ラウンドで各グループ上位2チーム、計8チームがグループ I～L に編成され、1次ラウンドの成績を引き継いでリーグ戦を行う。

各グループ上位2チーム、計8チームが「ファイナルフェーズ」の決勝トーナメントへ進む。

各グループ下位2チームの計8チームはこの2次ラウンドの各グループ内での戦績に基づくFIBAの判定基準(下記*)により、9位から16位までの順位が決まる。

9位～16位の順位決定

9位	スペイン	10位	オーストラリア	11位	モンテネグロ	12位	プエルトリコ
13位	ブラジル	14位	ドミニカ共和国	15位	ギリシャ	16位	ジョージア

この結果、世界ランキング1位のスペインが9位に、3位のオーストラリアが10位に沈んでいる。

* FIBAの判定基準

<1>勝数が多い、同一勝数では <2>得失点差が大きい、次いで <3>総得点が多いことで決まり、ここまで同数の場合 <4>世界ランキングの順位による。

17位～32位決定戦（8月31日～9月2日）の結果

グループ M (A/B下位)

順位	チーム	勝	負
M1	SSD	3	2
M2	PHI	1	4
M3	ANG	1	4
M4	CHN	1	4

グループ N (C/D下位)

順位	チーム	勝	負
N1	EGY	2	3
N2	NZL	2	3
N3	MEX	2	3
N4	JOR	0	5

グループ O (E/F下位)

順位	チーム	勝	負
O1	JPN	3	2
O2	FIN	2	3
O3	CPV	1	4
O4	VEN	0	5

グループ P (G/H下位)

順位	チーム	勝	負
P1	FRA	3	2
P2	LBN	2	3
P3	CIV	1	4
P4	IRI	0	5

2次ラウンドに進めなかったチームは別グループM～Pを編成して、2次ラウンドと同一期日に並行して各グループでリーグ戦を行った。

グループM～Pのチーム順位も、この戦績に基づく上記FIBA判定基準により決定される。

日本を含む3勝3チームは得失点差により下記のように順位付けされた。

WC 順位	G 成績	チーム	スコア				
			勝数	負数	総得点	総失点	差
17位	M1	南スーダン	3	2	456	431	25
18位	P1	フランス	3	2	405	394	11
19位	O1	日本	3	2	416	426	-10

20位以下32位までの順位を下記に示す。

20位	エジプト	21位	フィンランド	22位	ニュージーランド	23位	レバノン
24位	フィリピン	25位	メキシコ	26位	アンゴラ	27位	コートジボワール
28位	カーボベルデ	29位	中国	30位	ベネズエラ	31位	イラン
32位	ヨルダン						

パリ・オリンピックへの道

オリンピックへの推薦

この2023年ワールドカップの結果、各大陸で上位成績の7チーム（末尾に掲載）と開催国チーム（フランス）の合計8チームは2024年パリ・オリンピック出場に推薦される。

オリンピック最終選抜予選（OGT）（2024年6月）

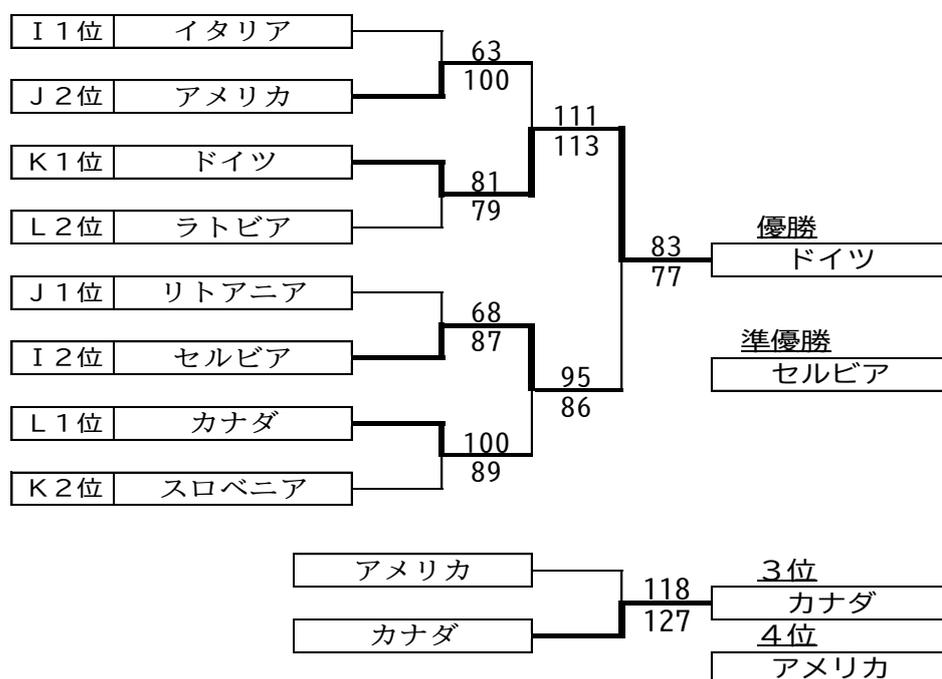
27位までに入る上記8チームを除く19チームに、去る2023年8月の選抜予選を勝ち抜いた5チーム（クロアチア、ポーランド、バハマ、カメルーン、バーレーン）を加えた24チームは、最終選抜予選（OGT）に出場する。

この最終選抜予選（OGT）は、24チームを6チームによる4グループに編成し、リーグ戦を勝ち抜いた各グループ首位の4チームを選定する。

パリ・オリンピック（2024年7月～8月）

上記推薦の8チームに最終選抜予選通過の4チームを加えた12チームが出場する。

ファイナルフェーズ（9月5日～9月10日）の結果 マニラ フィリピン アリーナ
決勝トーナメント



決勝戦

優勝候補のアメリカを準決勝で破ったドイツは、NBAで八村と同じチームに所属するPGのシュレーダーを擁し、セルビアはNBA所属のPFホクダノビッチを中心に戦った。

前半はお互いに厳しいディフェンスでシュートチャンスが少なかったが、それでも47-47の同点で終わる。

Q3に入った7分、ドイツがスライドイン攻撃を強め、選手のアピールに与えられたテクニカルファウルのフリースローも決めて62-53と抜け出した。

Q4、両チーム壮絶とも云えるディフェンスで得点が伸びない状況で、セルビアが追い上げるが点差は詰まらない。そんななか、セルビアはホクダノビッチの踏ん張りで残り1分に75-78と3点差に迫る。更にセルビアは残り40秒でフリースローを決めて77-79としあわや逆転かと思われたが、そのあと残り21秒にドイツのシュレーダーが早いドライブインで得点し4点差とする。

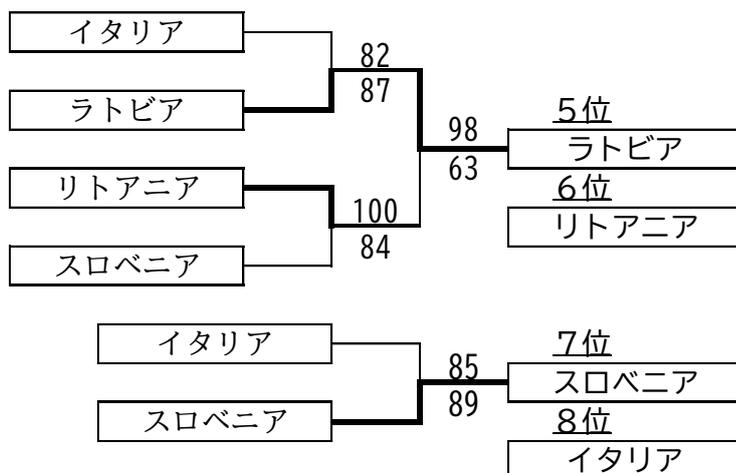
後がないセルビアはここからファウルゲームにでるが、ドイツのPGシュレーダーがフリースロー2本を決めて83-77となり、ドイツがこの接戦を制した。

この試合で見せた両チームの強烈なディフェンスは見習うところが多かった。オフENSEのスクリーンプレイに対しても素早くスクリーナーをかわして、ディフェンスのミスマッチにならないような動きや、なるべくシュートチャンスを与えないような密着ディフェンスは凄い。

それでもスライドインから遠くで空いている選手を見付けて素早いパスを送り、シュートチャンスがあったプレイヤーは誰でもが3Pを成功させる技術のぶつかり合いは見ごたえ充分。

日本が初戦で戦ったドイツは、このワールドカップで一度も負けることなく優勝したが、予選のドイツ戦を73-81と善戦した日本代表に拍手を贈りたい。

順位決定戦



【総評】

32チームが出場した今回のワールドカップは、強豪グループ、中堅グループとも戦力が拮抗し、細かな試合の流れによって勝敗が左右される傾向が強かった。最強と言われたアメリカが準決勝でドイツに苦杯を舐めさせられたり、点差が離れてからでも逆転があったりして、見ていた方には好感をもたらしたといえる。

決勝戦はドイツとセルビアのヨーロッパ勢同士の対戦となり、ドイツが僅差で優勝したが、この試合でも戦力は拮抗していて第4クォーター中盤まで一進一退であった。

【オリンピック出場決定チーム】（本ワールドカップで各大陸上位のチーム）

ヨーロッパ大陸	2チーム	ドイツ、セルビア
アメリカ大陸	2チーム	カナダ、アメリカ
アフリカ大陸	1チーム	南スーダン
アジア大陸	1チーム	日本
オセアニア大陸	1チーム	オーストラリア

【新しい世界ランキング・上位32チーム】（9月10日付）

1位 アメリカ	2位 スペイン	3位 ドイツ	4位 オーストラリア
5位 セルビア	6位 カナダ	7位 アルゼンチン	8位 ラトビア
9位 フランス	10位 リトアニア	11位 スロベニア	12位 ブラジル
13位 イタリア	14位 ギリシャ	15位 ポーランド	16位 プエルトリコ
17位 モンテネグロ	18位 ドミニカ共和国	19位 チェコ共和国	20位 フィンランド
21位 ニューージーランド	22位 ベネズエラ	23位 ジョージア	24位 トルコ
25位 メキシコ	26位 日本	27位 イラン	28位 レバノン
29位 中国	30位 クロアチア	31位 南スーダン	32位 ヨルダン

今回のワールドカップの成績を反映させ、FIBAが発表した。

世界ランク1位と2位はWC4位アメリカと9位スペインが入れ替わった。優勝のドイツが8ランクアップ、3位のカナダが9ランクアップ、5位のラトビアが22ランクアップしている。日本は11ランクアップした。

以上

FIBA ワールドカップ 2023 日本の活躍

「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表はパリ・オリンピック出場権獲得

[編集部]

FIBAワールドカップ 2023 は参加 32 チームのうち日本を含む 8 チームが沖縄で予選リーグである「グループフェーズ」に参戦した。32 チームの成績は別途お知らせすることとし、以下に、「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表の活躍ぶりを振り返りたい。

数次の合宿や強化試合の結果から選ばれた主なメンバーは次の通り。

<主なスタッフ>

役 職	氏 名	所 属
ヘッドコーチ	トム・ホーバス	公益財団法人日本バスケットボール協会
アソシエイトヘッドコーチ	コーリー・ゲインズ	公益財団法人日本バスケットボール協会
アシスタントコーチ	勝久 ジェフリー	川崎ブレイブサンダース
アシスタントコーチ	佐々 宜央	宇都宮ブレックス

<「AKATSUKI FIVE」男子日本代表選手>

*年齢・所属は2023年8月21日現在

NO	選手名	P	身長 cm	体重 kg	年齢 歳	所 属
2	富樫 勇樹	PG	167	65	28	千葉ジェッツ
5	河村 勇輝	PG	172	68	21	横浜ビー・コルセアーズ
6	比江島 慎	SG	191	88	33	宇都宮ブレックス
12	渡邊 雄太	SF	206	97	28	フェニックス・サンズ
18	馬場 雄大	SG	195	90	27	—
19	西田 優大	SG	190	90	24	シーホース三河
24	ジョシュ・ホーキンソン	C/PF	208	106	28	サンロッカーズ渋谷
30	富永 啓生	SG	188	80	22	ネブラスカ大学
31	原 修太	SF	187	96	29	千葉ジェッツ
75	井上 宗一郎	PF	201	105	24	越谷アルファーズ
91	吉井 裕鷹	SF	196	94	25	アルバルク東京
99	川真田 紘也	C	204	110	25	滋賀レイクス
	平均		192.1	90.8	26.2	

PG ポイントガード、SG シューティングガード、SF スモールフォワード、PF パワーフォワード、C センター

日本（世界ランク 36 位）は、「グループフェーズ・1次ラウンド」で各 4 チームのグループ A～Hのうち、グループ E に割り当てられ、世界ランクで格上のドイツ（11 位）、フィンランド（24 位）、オーストラリア（3 位）と戦い、1 勝 2 敗のグループ E 3 位となった。

従って、日本は、次のステージ「17 位～32 位順位決定戦」をグループ O で、グループ F の 4 位ベネズエラ（17 位）、3 位カーボベルデ（64 位）と戦って連勝し、グループ首位となった。この結果、日本は、アジア勢で 1 位となり、アジア代表として 2024 年パリ・オリンピックへの出場権を獲得した。（上記世界ランクは 2023 年 2 月 27 日付）

【グループフェーズ・1次ラウンド】 (沖縄アリーナ・8月25日～29日)

グループ E

順位	チーム	勝	負	ドイツ	オーストラリア	日本	フィンランド
E1	ドイツ	3	0		○ 85-82	○ 81-63	○ 101-75
E2	オーストラリア	2	1	● 82-85		○ 109-89	○ 98-72
E3	日本	1	2	● 63-81	● 89-109		○ 98-88
E4	フィンランド	0	3	● 75-101	● 72-98	● 88-98	

グループ F

順位	チーム	勝	負	スロベニア	ジョージア	カーボベルデ	ベネズエラ
F1	スロベニア	3	0		○ 78-62	○ 92-77	○ 100-85
F2	ジョージア	2	1	● 62-78		○ 85-60	○ 70-59
F3	カーボベルデ	1	2	● 77-92	● 60-85		○ 81-75
F4	ベネズエラ	0	3	● 85-100	● 59-70	● 75-81	

－ 日本代表戦績 －

8月25日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
ドイツ	23	30	16	12	81
日本	11	20	16	16	63

日本のスタートは、#2 富樫、#12 渡邊、#18 馬場、#24 ホーキンソン、#31 原で3P（3ポイントシュート）主体のオフェンスを狙ったようだが、ふたを開けてみるとドイツの厳しいディフェンスで3Pどころかボールが回らない状況。その上リバウンドを期待していた#24 ホーキンソンが前半にファウル3回となってベンチへ下がると、ドイツのワンサイドゲームとなってしまい、前半で22点のビハインド。

後半に入ると日本はディフェンスを強化し、ドイツの攻撃を防ぐと均衡した攻防となり#12 渡邊や#18 馬場の頑張りでも対等に戦う。しかしながら前半の22点のビハインドを詰めることはできず18点の大差で敗れる。

日本のディフェンスが機能しなかったせいか、ドイツは2Pで71.8%という驚異的なシュート成功率で圧倒、リバウンドでもドイツ47本に対して日本は36本と及ばず、ヨーロッパ勢の強さを見せつけられた感じ。それでも後半の得点で日本が32-28と上回ったことは次戦以降の大きな糧となった。

8月27日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	22	14	27	35	98
フィンランド	15	31	27	15	88

予選リーグ2回戦、日本は世界ランキング上位のフィンランドに果敢に攻めたことが功を奏してQ1（第1クォーター）はマアママの出だし、相手のシュートもあまり入らずリバウンドも互角にとれていたのがこのまま続くかと思われた。

Q2に入ると今度はフィンランドが猛攻、3Pを含む連続得点で開始2分過ぎ日本に追いつき、その後も日本のディフェンスが甘くなったところをつかれ、日本は10点ビハインドで前半を終える。このクォーター、日本は3Pシューターが抑えられた上、プレイが単発的になり、ターンオーバーも重なって逆転されてしまった。

Q3、何とか追いつきたい日本だったがフィンランドの勢いは変わらず、残り3分弱のところでは日本は53-71とこの試合最大の18点差をつけられてしまう。しかし日本はここから#5河村の絶妙なドライブインからアシストされた#24 ホーキソンが奮起、ディフェンスリバウンドから一人で走ってドライブインで得点するなど、反撃の様相となって詰め寄り、Q3の終わりに前半と同じ10点のビハインドとする。

Q4に入りディフェンスに疲れが見え始めたフィンランドに対して、日本は積極的に3Pで攻める。#5河村、#30 富永、#6比江島、#24 ホーキソンが放つ3Pが100%近く決まり出し、開始5分で同点とする。その後2分ほどシュートの入れ合いが続いて接戦となるが、残り3分日本#5河村が速さを生かしたドライブインでバスケットカウントを獲得、フリースローも決めて1点リードと抜け出す。

疲労でシュートが落ちるフィンランドに対して、#24 ホーキソンがリバウンド、#5河村や#30 富永が走って素早く得点、日本のお家芸でもある速いオフェンスで連続得点し残り1分で8点のリードを奪い、そのままのペースでタイムアップ。

この試合で日本は、勝利への執念が際立ち、Q3で27点、Q4で35点とめったに見られない高得点であった。肝心なところで#6比江島の3P、#5河村や#30 富永の爆発的3P、体を張った#24 ホーキソンや#12 渡邊のリバウンドなど、120%の出来であり、2006年以來17年ぶりでヨーロッパ勢に勝利した。

得点でも#24 ホーキソン28点、#5河村25点、#6比江島17点、#30 富永が17点を挙げ、ランキング格上のヨーロッパチームから98点を挙げた戦いぶりは歴史に残る。

8月29日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
オーストラリア	25	32	30	22	109
日本	17	18	35	19	89

日本は、世界ランク3位のオーストラリアに果敢に挑んだが、ドイツ戦同様出だしから思うようにプレイさせてもらえず、オーストラリアペースで前半を終え、35-57と22点のビハインドとなる。

Q3、ポイントガード#2 富樫が3Pを決めると日本のペースとなり、#12 渡邊のミドルや#24 ホーキソンのインサイドなどで大量得点し点差を詰める。しかしオーストラリアがベストメンバーに入れ替わると日本の得点ペースが落ち、それ以上得点を詰めるには至らなかった。Q4に入り日本は少しでも点差を詰めるべく頑張るが、オーストラリアの厳しいディフェンスの前にターンオーバーを多発、結局前半の点差を詰めるまでには至らず、20点差で敗れる。

この試合、殆ど休みなしの#24 ホーキソンは33点をたたき出し、#12 渡邊も24点をあげて意地を見せ、これまで得点が少なかった#2 富樫も3P3本を含む14点を挙げたが、世界ランク3位の壁は厚くドイツ戦同様、日本は軽くあしらわれてしまった。

1次ラウンドを終えて日本は1勝2敗となり、上位の2次ラウンドに進出できず下位順位決定戦に回ったが、この時点でアジア勢のうち上位ラウンドに進出したチームはなく、2024年パリ・オリンピック出場権単独獲得の可能性が残された。

【17位～32位決定戦】（8月31日～9月2日）

グループ O

順位	チーム	勝	負	日本	フィンランド	カーボベルデ	ベネズエラ	ドイツ	オーストラリア
O1	日本	3	2		○ 98-88	○ 80-71	○ 86-77	● 63-81	● 89-109
O2	フィンランド	2	3	● 88-98		○ 100-77	○ 90-75	● 75-101	● 72-98
O3	カーボベルデ	1	4	● 71-80	● 77-100		○ 81-75	● 77-92	● 60-85
O4	ベネズエラ	0	5	● 77-86	● 75-90	● 75-81		● 85-100	● 59-70
								スロバニア	ジョージア

8月31日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	15	21	17	33	86
ベネズエラ	19	22	21	15	77

順位決定戦に回った日本だったが、今度はパリ・オリンピック出場権単独獲得へ向けて全力を傾注する。1次ラウンドから1勝も挙げていないベネズエラだったが、ふたを開けてみるとやはり簡単に勝てる相手ではなかった。

日本は、3Pではそれなりの成功だったが、相手の荒っぽいディフェンスに惑わされてか、ミドルシュートが思うように決まらず、前半で5点をリードされた。それを引きずったQ3では残り2分過ぎで13点のビハインド。Q4に入っても2分過ぎには15点の最大点差が開く。

Q4でタイムアウトをとった日本は、ホーバスコーチの叱咤に目覚めたか、以後、まるで別のチームに見えた。#6比江島の少し強引とも見える3P成功を機に、#5河村のスライドインや3Pで一気に詰め寄り、日本は、5分で同点にし、そしてベネズエラを抜き去った。#5河村は、#6比江島へのビハインドザバックパス、#18馬場へのアレイウープと華麗なプレイを見せた。

このQ4で3本の3Pを決めた#6比江島の大車輪を筆頭に気を抜くことなく猛攻を続け、厳しいディフェンスから相手のターンオーバーを誘う場面も多発した。

ターンオーバーでは日本の13に対しベネズエラは19、得点ではQ4だけで17点の#6比江島がトータル23点、#12渡邊が21点、#5河村19点と素晴らしい日本の成績。

9月2日

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	17	33	23	7	80
カーボベルデ	19	18	18	16	71

この試合に勝てば日本はアジア勢で単独首位となり、2024年パリ・オリンピック出場権を獲得できる背景があっただけでなく、出だしは固くなってシュートもあまり決まらない。しかしQ2に入ると、まるで変わったチームになったように#30 富永の3Pや#5 河村の3Pに加え、#24 ホーキソンが力強くインサイドで得点を決め、前半を終えて13点のリード。

カーボベルデはNBA所属の213cmのセンターがいるがやはり1人では機能しなく、外角からのシュートも落ちるようになる。一方、日本は調子よくQ3で18点をリードする。このリードに安心してかQ4に入るとオフェンスが甘くなって守勢となりあつという間にカーボベルデが3点差に詰め寄る。

タイムアウトを取った日本はホーバス・ヘッドコーチが「まだ終わってない！」と激怒。これに覚醒してか日本は#24 ホーキソンがリバウンドに体を張り、オフェンスでは#30 富永をはじめとする3Pで再び攻勢となり快勝した。

この試合日本のシュート成功率は3P、2P、フリースローを含め45%と相手の38%を上回り、勝利の原動力となった。

【アジア地区チームの成績】 (新世界ランクは2023年9月10日付け)

WC 順位	G 成績	チーム			スコア			新世界 ランク
			勝数	負数	総得点	総失点	差	
19位	O1	日本	3	2	416	426	-10	26位
23位	P2	レバノン	2	3	397	479	-82	28位
24位	M2	フィリピン	1	4	398	419	-21	38位
29位	M4	中国	1	4	379	473	-94	29位
31位	P4	イラン	0	5	321	419	-98	27位
32位	N4	ヨルダン	0	5	369	475	-106	32位

【あとがき】

今回のワールドカップで日本は、順位決定戦に回ったものの、最初のドイツ戦を除く全試合で80点以上の得点をあげて3勝2敗と勝ち越し、アジア大陸代表として2024年パリ・オリンピック行きの切符を手にした。男子日本代表が単独自立でオリンピック出場権を手にしたのは1978年のモントリオール以来48年ぶりの快挙。ワールドカップが終わってから、テレビでは連日のように男子代表の放映が行われ、日本中でバスケットボール熱が沸騰したが、スポーツではやはり勝つことが最大のテーマであることを物語っている。

日本は、全試合を通じてすべての選手が華麗なプレイを披露し観客を沸かせていた。更に、勝利した3試合は、フィンランド戦では#5 河村、ベネズエラ戦では#6 比江島、カーボベルデ戦では#24 ホーキソンが、それぞれ終了間際にシュートを連続して決めて盛り上がった。その興奮が日本国中を駆け巡ったのであろう。

また、#12 渡邊、#30 富永、#18 馬場、#2 富樫の華麗なプレイと他のすべてのメンバーの堅実なプレイによる活躍も称賛したい。

日本代表が一時リードされながらも諦めずに戦って逆転した姿は、多くのファンに感動をもたらした。

さあ、次は世界12チームの強豪が集まるパリ・オリンピックでの勝利だ。

以上

第19回アジア競技大会（杭州）

「AKATSUKI JAPAN」女子日本代表は、中国に惜敗し銀メダル

[編集部]

第19回アジア競技大会（杭州アジアカップ2022）は、中国杭州において、1年延期となつて9月23日から10月8日まで、多種目にわたり開催された。

日本代表は、ワールドカップ直後の男子に2軍を派遣、女子は優勝を目指して代表チームを派遣した。以下に女子日本代表チームの主な結果と戦績を報告する。

< 主なスタッフ >

役職	氏名	所属
ヘッドコーチ	恩塚 亨	公益財団法人日本バスケットボール協会
アシスタントコーチ	鈴木 良和	株式会社 ERUTLUC
アシスタントコーチ	今野 駿	ENEOSサンフラワーズ

< 「AKATSUKI JAPAN」女子日本代表選手 >

年齢・所属は2023年9月20日現在

NO	選手名	P	身長 cm	体重 kg	年齢 歳	所属
4	川井 麻衣	SG	171	64	27	トヨタ自動車 アンテロープス
8	高田 真希	C	185	77	34	デンソー アイリス
11	藪 未奈海	SF	178	61	18	デンソー アイリス
12	朝比奈 あずさ	C	185	75	19	筑波大学2年
15	本橋 菜子	PG	164	55	29	東京羽田ヴィッキーズ
27	林 咲希	SG	173	65	28	富士通レッドウェーブ
31	平下 愛佳	SG	177	67	21	トヨタ自動車 アンテロープス
32	宮崎 早織	PG	167	56	28	ENEOSサンフラワーズ
59	星 杏璃	SG	170	65	23	ENEOSサンフラワーズ
75	東藤 なな子	SF	175	65	22	トヨタ紡織 サンシャインラビッツ
88	赤穂 ひまわり	SF	184	71	25	デンソー アイリス
99	オコエ 桃仁花	PF	182	85	24	UC Capitals
	平均		175.9	67.2	24.8	

PG ポイントガード、SG シューティングガード、SF スモールフォワード、PF パワーフォワード、C センター

女子予選ラウンド グループ編成と対戦結果 （世界ランキングは2023年8月1日付け）

グループ A

グループ B

グループC

	世界	順位		世界	順位		世界	順位
中国	2	A1	日本	9	B1	韓国	13	C1
インド	67	A2	フィリピン	37	B2	北朝鮮	86	C2
インドネシア	51	A3	香港 中国	105	B3	*タイペイ	33	C3
モンゴル	91	A4	カザフスタン	70	B4	タイ	62	C4

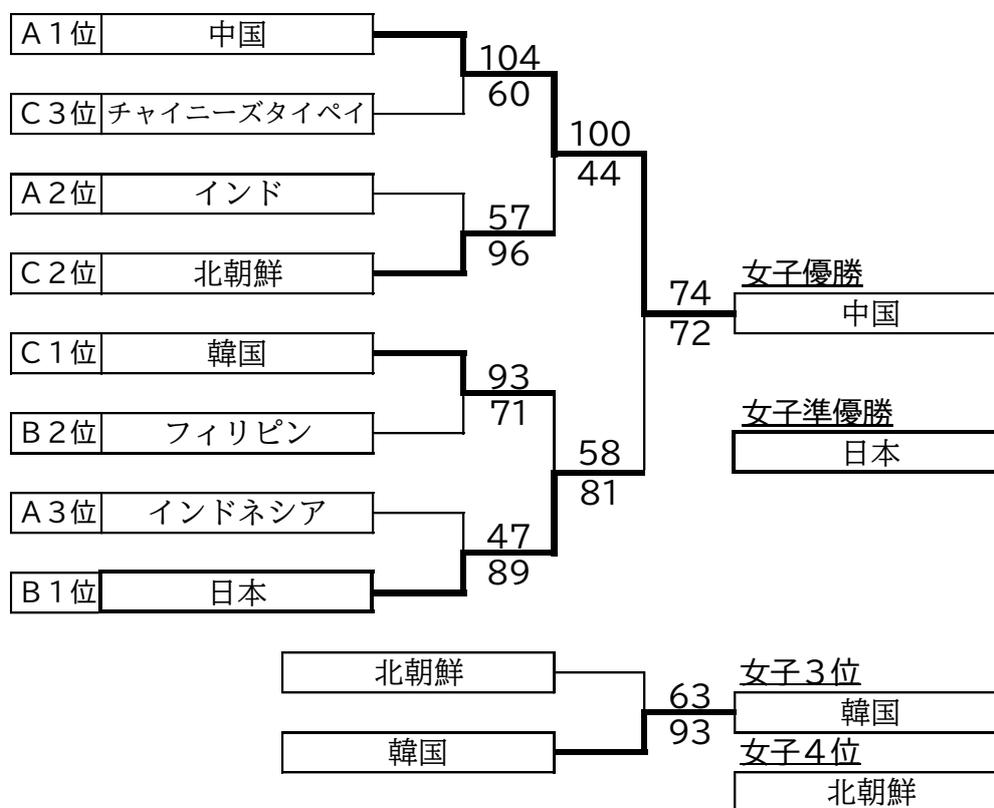
*チャイニーズタイペイ

グループBの戦績（9月27日～10月1日）

順位	チーム	勝	負	日本	フィリピン	香港 中国	カザフスタン
B1	日本	3	0		○ 96-59	○ 118-46	○ 92-30
B2	フィリピン	2	1	● 59-96		○ 99-63	○ 83-59
B3	香港 中国	1	2	● 46-118	● 63-99		○ 70-56
B4	カザフスタン	0	3	● 30-92	● 59-83	● 56-70	

予選ラウンドの日本は、危なげなく3戦3勝でグループBの1位になり、ベスト8による決勝トーナメントに進んだ。

女子決勝トーナメント 10月2日～5日



「日本」の戦績

10月2日 準々決勝 VS. インドネシア

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
インドネシア	15	12	9	11	47
日本	25	20	22	22	89

10月3日 準決勝 VS. 韓国

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	20	20	16	25	81
韓国	15	18	11	14	58

10月5日 決勝 VS. 中国

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
中国	26	19	12	17	74
日本	16	24	11	21	72

これまで順調に勝ち上がってきた日本だったが、決勝戦では体調不良により#15本橋と#59星を欠く10名でFIBAランク2位の中国と対戦することになった。中国は2m超のセンター2枚を擁し、平均身長でも日本より10cm上回る大型チームで、ディフェンスとりバウンドでどれほど対抗できるかがキーポイント。

Q1での日本は、ディフェンスが甘く中国に一方的なオフェンスを許してしまう一方、中国の執拗なディフェンスに手を焼いてシュートチャンスも少なくなり、10点差。

この状況はQ2でも続き、日本は開始早々18-35と17点差をつけられる。タイムアウト後に日本がディフェンスを厳しくするとようやく中国の得点が止まり、日本は終盤#31平下や#27林の3Pなどで追いつき、40-45と迫って前半を終える。

Q3、上背の優る中国を抑えるため厳しいディフェンスを続けたこともあってか、日本はオフェンスに精彩を欠き、シュートも苦し紛れのロングシュートで入らなかったが、中盤から#88赤穂や#75東藤が頑張つて得点し、1点差まで詰め寄った。

Q4、激しいディフェンス合戦のせいかお互いにシュートが決まらなくなるが、中国はボールをインサイドに集めて上背の高い選手がミドルシュートを決める。対する日本も#32宮崎が素早いスライドインでバスケットカウントを奪い、#88赤穂もリバウンドやスライドインで大車輪の活躍を見せて必死に食いつく。

こうして点差を詰めた日本は、残り3分に#75東藤の2Pで67-67の同点とする。しかし、その後、中国の先行が続く。勝負となった残り1分を切り69-72の劣勢から#27林がサイドから3Pを決めて72-72の同点としたとき、残り時間はわずか13秒。

延長戦かと思われたが、中国は早い攻撃のスライドインで2点をリード。日本は、残り7秒で必死に走ったが最後の#88赤穂のシュートが決まらず、結局2点差で敗れた。

日本は肝心の試合で2名の選手が体調を崩して出場できず、先発メンバーに負担がかかっても交替が遅くなり、中国の執拗なディフェンスを振り払うために体力を消耗して、肝心なところでシュートが決まらず、7月のFIBAアジアカップに続き2点差で敗退した。

国際大会でのメンバーは12名と決められており、チームスタッフは敗因の一つに遠征時における選手の健康管理不足があったことを痛感してもらいたい。

あとがき

今回の大会はオリンピック出場やワールドカップなどに関係がないためか、男子代表は2軍を派遣したため成績は振るわず、グループ首位で通過して準々決勝に進んだが、順位決定戦で全敗して、8位に終わっている。

女子については決勝トーナメントに進み決勝戦で中国に敗れたが、来年2月開催されるオリンピック世界予選への出場が決まっている。オリンピック世界予選はヨーロッパを始めとする大型強豪チームとの対戦となり、その意味では今回の中国戦が良い試金石となるだろう。高身長チームに対する対応策や、厳しいディフェンスを敷かれた際の3P成功策など課題は見えている。

以上

【人物抄】 大庭哲夫

—日本バスケット界の発展に多大な貢献—

[歴史部]

日本バスケット界の復興期から発展期に移行する時代に多大な貢献をした「大庭哲夫」氏（1903年12月2日～1979年3月17日）の人生をたどる。

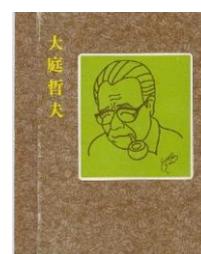
（1）香川県高松市出身、戦前の早稲田大学全盛時代の名ガードとして活躍

香川県木田郡古高松村（現高松市）に生まれる。大庭の家系は、高松藩の家老の家の息子とも侍医の息子ともいわれているが、生まれた所が高松のお城の中で、そこに家がありお城の庭が子供時代の遊び場だった。

香川県立高松中時代にバスケットボールをはじめ、第一早稲田高等学院に入学、早稲田の穴八幡神社の前、校門を入ったところに木造2階建ての本屋があり、その裏に屋内体操場があってバスケットボールの練習をしていた。

早稲田大学理工学部電気工学科に進学。昭和の初期、バスケットボール競技は、人気スポーツで早稲田大・立教大・東京商大・中央大・明治大・東京帝大の関東大学リーグがその頂点であった。1926年（大15）に早稲田大学は全日本総合選手権で優勝し、1927年（昭2）早稲田大学は、日本で初めてアメリカ遠征を計画、李監督、富田主将のもとに大庭もチームの一員に選ばれ、多くの新技術を身につけて帰国した。1928年（昭3）リーグ戦に初優勝し、早稲田大学の第一次黄金時代を、大庭は名ガードとして常にチームを支えた。自分が卒業するとキャプテンがいなくなるので留年してやると主張しわざわざ落第して一年プレイした。1930年（昭5）3月に卒業、この年東京で開催された第9回極東選手権大会の日本代表選手に選ばれ、予選でフィリピンに1勝1敗、中国には連勝し、初めて決勝戦に臨んだがフィリピンに惜敗。極東選手権大会で日本が初めて決勝戦進出を果たしたのを最後に、現役の選手生活を終えた。

卒業後、丸の内の会社に勤めたいが1年ぐらいでやめて、その後1933年（昭8）逓信省航空局東京飛行場に勤務。1937年（昭12）頃、当時事務所が大手町にあり神田の国民体育館に近かったので昼休みにバスケットを楽しんでいた。その後、台湾総督府交通局航空官を務めた。



大庭哲夫追想録

（2）戦後、バスケット界はいよいよ大庭の出番

戦後、スタートした日本協会の理事長は、富田毅郎（早稲田大学）から三ッ本常彦（東京商大）に引き継がれた。1953年（昭28）に三ッ本理事長が退陣するとき、三ッ本と富田は相談の結果、次期理事長として大庭にお願いしようとする二人の考えは一致した。日本協会は、組織的に急速に復旧したが、当時は、まだ社会、経済状態ともに荒涼しており難問が山積していた。将来の発展のためにバスケットボールに対する情熱だけでは解決できるわけではなく、社会的キャリアや政治的な手腕と大きくなった組織の運営手腕も必要で、その点から考慮すると大庭が最適な人材ではないかと三ッ本と富田は判断した。

大庭は二人の懇請を受け入れ 1953 年（昭 28）4 月、日本バスケットボール協会の理事長に就任した。

（3）最大の理解者であり協力者「植田義巳」との出会い

大庭と植田との初めての出会いは、第 8 回極東選手権大会（1927 年上海）の東京予選。大庭は、早稲田大学で、植田は東京商大の選手として対戦し、準決勝 3 点差で負けたのが始まりであった。その後インターカレッジや全日本選手権などで何度も対戦した。そして、二人が本当の友人になったのは、1930 年（昭 5）第 9 回極東選手権大会に日本代表にともに選ばれ、その時の合宿で同部屋になったことであった。この大会で 2 人は大活躍し、極東選手権大会でそれまで勝ったことのない中国に 2 連勝しフィリピンに 1 勝 1 敗のあと決勝で敗れたが準優勝。この時以来 2 人は、大学は異なるが無二の親友となった。

1955 年（昭 30）4 月、大学を卒業して以来会ったことのない大庭が植田の会社を突然訪れる。植田は夕食を食べようと誘われ深く考えず OK した。大庭は、日本協会の理事長で植田に片腕となって働いてくれと依頼した。「バスケットボールへの情熱と語学力を買ってのこと」と思われる。以来 1967 年までの 10 数年間、植田は、渉外関係（国際）の仕事を一手に引き受けて、個人的にも費用と時を費やし、大庭への協力を惜しまず、その間、1958 年「第 3 回アジア大会」、1964 年「第 18 回オリンピック東京大会」、1965 年「東京ユニバーシアード大会」など 3 つの国際的事業を担当した。

（4）戦後の復興期から発展期へ組織の強化・拡大を図った大庭体制

バスケットボール界を復興期、発展期、全盛期などに分けると 1953 年（昭 28）頃は、戦後の復興期の地固めが一応終わり、全国的な体制がようやく整ったころだと考えられる。

大庭は、理事長に着任すると、早速、協会組織の強化拡大を当面の目標として掲げ、その手始めとして、以下の 3 つの構想を打ち出した。

- ① 全国の都道府県協会組織の確立と代議員制度を設置すること。
- ② 日本実業団連盟、全日本学生連盟、全国高体連を日本協会の組織内組織として自主性を持つ団体として育成し、全日本実業団、全日本学生の両選手権大会の運営を各連盟に任せること。
- ③ 日本協会は、全日本選手権、国民体育大会の運営と国際競技力の向上およびそのための国際競技会の実施と派遣に総力を挙げる。

この方針は、一部に相当の議論を呼び起こしたが、結局は、大綱的に承認され、ここに日本バスケットボール界は、時流に乗って新しい時代を迎えることとなった。

（5）大庭理事長と 1964 年東京オリンピック大会

・日本バスケットボール協会

実施された制度は、代議員制度の確立により、地方協会の意見が日本協会に反映されることにつながり、各加盟組織団体を尊重し自立した運営することにより、全国のバスケットの普及・活性化に効果を発揮した。

日本協会の活動は、全日本総合選手権大会（各連盟から選抜された代表チームが日本一

を競う総合選手権)と国民体育大会の運営を主催することと、強化につながる国際大会の開催・海外派遣など日本代表チームの強化に専念した。

日本バスケットボール界の活動の役割分担を明確化した効率的運営は、人材(役員)の育成にもつながった。その結果、各組織の役員が「活動の原動力」となり日本協会を支え協力する良好な関係を保ち、この合理的体制は永く機能したと評価できる。

・国際大会の運営

第18回東京オリンピック大会を含め3つの国際大会を開催、各組織の役割分担を明確化し協力して問題なく大会を開催し閉幕できた。

特に東京オリンピックは、日本協会・実連・学連・高体連などの役員400人が分担して大会運営を行い、参加国の役員・選手はもちろんFIBA本部役員から実務・運営について「EVER THE BEST」と評価された。権限を委譲された役員は十分その役割を果たした。

・審判のレベル向上

大庭は、バスケットボールの技術向上にもつながる審判の力量の向上が必要と考え、翌年に東京オリンピックを開催することから1963年(昭38)の世界選手権大会(ブラジル・リオデジャネイロ)に日本から審判員を派遣することとした。当時の日本の審判のレベルは世界的にもかなり高水準にあり、あとは経験を積むことが必要と判断し、審判委員会の希望通り3名を派遣した。この3名の審判員は、予選、下位リーグ、上位リーグと合計22試合を担当、日本人審判レベルの高さを発揮して十分にその役割を果たした。日本人審判のレベルの高さを示した世界選手権大会であった。

世界の国々の信頼を得た結果、東京オリンピックでは準決勝、3位決定戦、優勝戦の4試合中3試合を日本人審判員が担当、それぞれ世界のトップレベルの審判員と組んでその責務をはたした。画期的なことであり、大庭の英断が実を結んだ結果と考えられる。

(東京オリンピック審判委員長であった古川幸慶は、このことを日本の審判の歴史に記録されるべきことと評価している。)

・日本体育協会 専務理事として

東京オリンピック大会開催の前年1963年(昭38)に、石井光次郎は日本体育協会会長、大庭は専務理事に就任、「わたしのよき女房役として東京オリンピックの開催に大きな役割を果たしてくれた。」と評価している。

(6) 多岐にわたる活動—体育・社会教育・航空界など

日本体育協会のJOC総務主事、専務理事を務め、日本選手団団長として第5回アジア大会、第19回オリンピック・メキシコ大会と第一戦で指揮をとり、東京ユニバーシアード、札幌オリンピック冬季大会組織委員も兼任した。

社会教育面では、文部省の保健体育審議会委員、国民体力づくり事業協議会、日本青年会理事などを歴任。具体的には「体育指導者養成とスポーツ教室の発足」「青少年スポーツセンターの設置」など体育行政の基本施策の根幹となるべき諸施策の実現に尽力した。

日本体育協会の職務のかたわら、JAL(日本航空)の常務取締役、全日空の社長など航空関係の役職も歴任した。

大庭の活動はバスケット界だけでなく体育行政、社会教育関係へ広がり、多岐にわたり実に多忙であったと考えられる。

(7) 最後に

10 数年続いた大庭体制も徐々にひずみが出てきて、いろいろと批判も起き、1967 年（昭 42）理事会で総辞職をすることになり、大庭は「我々は、来年 1 月に任期が来るので全員やめましょう」とだけ発言、実に堂々としてさわやかな退任のあいさつであった。

1967 年（昭 42）日本協会は、メキシコ・オリンピック出場権を失った責任をとり総退陣した。三橋誠を中心に竹崎、鹿子木、松井などベルリン・オリンピック組が後を継ぐことになった。大庭は、このメキシコ・オリンピックの日本選手団の団長を務めている。

その後、1971 年（昭 46）に参議院選選挙に香川地方区から立候補したが、当選を果たせなかった。石井光次郎（元日本体育協会会長・元衆議院議長・元運輸大臣）は、「わたしも応援に駆け付けたが不幸にも当選せず、政界入りの希望は、これ一回で縁切りになった。大庭さんのさっぱりした性格は政界に向かなかったのかも知れない」と語っている。

大庭は、バスケット界以外でも、日本の復興期から発展期の時代に先見的役割を果たした。大きな組織をまとめ大きな事業を進めることに、なんとなく茫洋とした風貌が物事を進めるうえで役立ったのかもしれない。

1971 年（昭 46）、参議院選香川地方区から立候補した際の宣伝ビラには、大庭のことを「大きな身体に、大きな理想、万難を排し、約束を守る、恬淡無欲そのまま、付き合いは比類なし、大庭哲夫の心意気」（中川幸男氏作成）と紹介している。

- ・ 1968 年 11 月 16 日、黄綬褒章を受章
- ・ 1974 年 4 月 29 日勲二等旭日重光章を受章
- ・ 1979 年 3 月 17 日没 73 歳

〈主な役職・経歴〉

- ◎ 日本バスケットボール協会関係
 - * 第 16 回メルボルン・オリンピック大会監督・理事長・副会長・顧問
- ◎ 日本体育協会・オリンピック委員会関係
 - * 専務理事・JOC 常任委員・東京ユニバーシアード大会委員
 - * 札幌オリンピック冬季大会委員・第 5 回アジア競技大会（バンコック）日本選手団団長・第 19 回メキシコ・オリンピック大会日本選手団団長
- ◎ 文部省関係
 - * 文部省保健体育審議会委員・財団法人スポーツ振興資金財団理事
- ◎ 航空関係
 - * 運輸省航空庁長官・日本航空株式会社顧問／常務取締役・全日本空輸株式会社取締役社長・東京空港交通株式会社取締役社長 など

〈参考資料〉

- * 『大庭哲夫追想録』大庭哲夫追想録刊行会（昭和 58 年 4 月）
大庭の死後、3 年余り過ぎてから、生前親交のあった方から追想原稿を集め刊行した。
- * 『早稲田大学バスケットボール部（RDR）60 年史，80 年史』早稲田大学 RDR 倶楽部（昭和 58 年 2 月、平成 14 年 6 月）
- * 「バスケットボールの歩み」（日本協会 50 年史・1981.3.30 発行）

以上

会員だより



嘘のような、本当にあった話

元高校教諭 須田 武志

本寄稿は、滋賀県立膳所高等学校の男女バスケットボール班を長年指導された須田武志先生によるもので、前2号（初回97号、2回目98号）の続きです。（編集部注）

その4. 近畿大会初優勝 1971（昭和46）年2月

当時の高校のバスケットの全国大会は、インターハイのみであった。インターハイは、学校体育の一環として実施され、高校生の全国大会は、年に1回と制限されていた。ただ、高校野球だけは、何故か、昔から春の選抜大会と夏の大会と二回実施されている。それに対して、誰もおかしいとか不思議だとは思わなかった。

それが、誰の提案かは定かではないが、とに角、野球のようにバスケットボールも高校の全国大会をもう一つ増やそうではないかということで、1971（昭和46）年3月に、東京で全国高校選抜優勝大会（その後、ウインターカップに、そしてウインターカップ兼全国高等学校選手権大会に名称変更）が開催される運びとなった。この大会は、急に決まった大会ではないかと（私個人では）思っている。

この大会に参加出来るのは、全国各ブロックから予選で勝ち抜いた男女精鋭各16チームである。私の学校は近畿地区にあり、この全国高校選抜優勝大会に出場出来るのは、たったの2チームだけである。

この大会の開催条件、「社会体育」の一環として実施されるので、選手の交通費や宿泊費等は日本バスケットボール協会が負担することになっている。（但し、エントリーのみ）

この大会が急に決まったため、滋賀での予選と近畿大会予選との間隔が殆どなく、滋賀県予選が終わって、僅か2週間後に近畿大会の予選が開催された。

【近畿大会滋賀県予選】 1月31日・2月7日

決勝 膳所 51 対 29 八幡工

【近畿大会】 2月20～21日 奈良県立橿原公苑体育館

近畿地区には6府県ある。その中で、大阪、兵庫、京都は格段レベルが高い。これに比べて、残りの和歌山、奈良、滋賀は一段も二段もレベルが下がる。大阪、兵庫、京都には多くの強豪チームが薙めいている。幸いなことに、この大会の参加出来るチーム

会員だより

は、各県1位の6チームだけである。初日は6チームが3つのグループに分かれて対戦。勝ったチームで翌日リーグ戦。強豪校ばかりなので、2日間で3試合は、壮絶な戦いになることが予想された。

地元奈良は、近畿6府県の中から1番弱いと思われる滋賀のチームと対戦となった。

・2月19日（金）午後1時 開会式

開会式のときにももらったプログラムには、近畿6府県のうち、男女とも4府県のみが印刷されていたが、あと2県は男女ともガリ版で印刷されたプリントがプログラムの中に挟んで入れてある大変雑なプログラムであった。この大会が、如何に急拵えで出来た大会であったかがうかがいしることが出来る。

・2月20日（土）試合開始

いよいよ奈良で第1回全国高校選抜優勝大会近畿地区予選会が始まる。近畿6府県から選ばれた6チームによる戦いが始まる。なにしろ、初めての大会でもあり、コンディションをどのように持っていったらよいのか難しい。インターハイ予選などは、ある程度のことは計画立ててやれるのだが、今回の大会ばかりは、第1回ということもあって、全く見当がつかないままで、今日を迎え、そして、間もなく終わり、いよいよ明日を迎える段取りとなった。

とに角、あとは全力を出して出場権を獲得するのみである。宿舎から会場へ向かう道中、幾つかのチームと一緒にになった。我がチームに比べて、他のチームは、背も高く横幅もある立派な体格をしている。下手すると恥ずかしい内容の試合になるかもしれないと不安な気持ちを抱きながら会場に向かった。

・試合の結果

1回戦

膳所 64 (34-22) 47 一条(奈良)
30-25

・第1日目の夜のこと

夜の7時半に、宿舎の風呂に入り、8時過ぎに部屋に戻ったら、キャプテンの尾松素樹が「トミタが熱を出したので、顧問の先生と一緒に病院に行きました。」と私のところに連絡が来た。トミタという名前の部員は1年生に1人、2年生に1人いるので、どちらのトミタかな？ 1年生のトミタであればよいのに（よいことはないが）と願いつつ、「どちらのトミタだ？」と聞いたら、やはりスタメンで、ポイントゲッターの2年生のトミタだったので、がっくりきた。折角、今日は楽勝の試合をしたというのに、熱を出して病院に行くとは不屈きな奴だ。明日の2試合のうち、少なくともどちらかの試合に勝てば、全国大会への出場権が得られるというのに……。戦いの前夜にして、このような状況では、明日の試合の勝ち目は考えられない。『トミタのバカ！』

まもなく、もう一人の顧問の岡野先生とマネージャーの沢田恭明と一緒に、2年生のトミタが元気のない顔をして宿舎に戻ってきた。熱は37.9℃もあり、診断の結果は、インフルエンザということであった。医者からは、「安静にするように」といわれ

会員だより

たという。おそらく明日の試合には出場させることは出来ないだろう。そう思うと残念で仕方がなかった。

・ 2月21日（日）

昨夜、熱を出して病院に行った2年生のトミタが、今朝、体温を測ったら平熱の温度であった。本人に、「今日、どうする？」と聞いたら、「試合に出たい。出ます。」といった。彼の様子を見ながら試合に出そうと思った。

・ 決勝リーグ

膳所 74 (39-19) 26 御影工 (兵庫) ※
35-7

※現、神戸市立科学技術高校

膳所 74 (39-25) 56 初芝 (大阪)
35-31

1位 膳所、 2位 御影工



試合が終わって

興奮冷めやまない優勝直後に、私が生徒に話したことは、「勉強とバスケットボールの両立おめでとう。明日の朝は学校に絶対に遅刻するなよ。みんながお前たちを見ているぞ」であった。そして、「今日の帰りもチャンとして帰ろう。」

近畿で初めて『優勝』という栄誉に恵まれたけれども、正直な気持ちは、『なんだ、近畿の優勝ってこんなものか』ということだった。生徒は跳び上がって喜ぶ訳でもないし、私を胴上げしようとする訳でもない。先生も生徒も、やっと試合が終わったという程度の軽い気持ちだった。今年のチームのテーマが『冷静沈着』であったためか、また、特に今年の生徒は、例年以上に指導者の私に似てか、『哲学者の集まり』のような冷静な集団であった。ただひたすらに飽きることもなく、もくもくと練習する生徒の集まりであった。なんの取り柄もない、ひ弱な生徒ばかりの集団であった。

2日間で3試合という強行スケジュールの大会であり、しかも全試合に勝っての優勝であり、生徒は心身ともに大変疲れていた。もちろん、私自身も疲れていた。帰りの近畿電車の中は、暖房がよく効いていたので、非常に眠くなってくる。半分位の生徒は疲れたのか、居眠りしていたが、残りの半分の生徒は京都までの1時間余りの電車の中で、参考書を開いて勉強しているものや豆単を開いてそれを覚えているものなど、

会員だより

いろとりどりだった。生徒たちの電車内でのそのときの光景が、いまだに私の頭から離れない。

普通、近畿大会で優勝すれば、しかも初めての大会で優勝すれば、誰でも嬉しいし、有頂天にもなるし、バカ騒ぎもしたくなるのが普通であるが、この子らを見てみると試合に勝ったときも負けたときも殆ど表情を表に出さない。このことに、私自身、大変驚いている。しばしば、私の指導が悪いのだろうかと思うことがある。

だいたいにおいて、強いチームのときは不思議と進学の成績もそれに比例してよい。そのときのスタメンの中に、のちに医師が2人、博士号取得者が2人、ほかであった。

後日談 1971（昭和46）年4月3日

毎年、3月の大相撲春場所が終わった直後の4月初めの春休みに、大阪府立体育会館で近畿高校バスケットボール大会が行われる。試合まで少し時間に余裕があったので、食堂に入っていったら、近畿のバスケットボール界の重鎮が沢山集まっておられた。そのとき、誰かが、先日の2月に奈良で行われた試合を見ての感想を私に話された。「膳所高校のようなチームはどのようにして出来たの？」と国際公認審判員の山戸先生。「ひとりで勝手に出来たのです。」と私。「それにしても素晴らしいバスケットボールをするものだ。」と奈良教育大の岡本教授。「いいえ、毎年同じことを教えているだけです。」と私。「毎年、同じことを教えていても、少しずつ、教え方が変わってくるだろう。」と隣に座っていた先生。「毎年、少しずつ給料が上がっているのだから、その分だけ指導法が向上しているのかもしれない。」（笑い声）「毎日、どんな内容の練習をしているんだ？」、更にいろいろな質問が飛び出してくる。「バスケットボールコートが1面しか取れない薄暗い（天井は蛍光灯）貧弱な体育館です。多くのクラブとその男女が使っているため、毎日、体育館が使えません。また、常時、バスケットボールコートが半分しか使えません。練習内容は、1対1が主で、その後にフォーメーションプレーを使った5対5の練習をする程度です。超人的な練習など決してやっている訳ではありません。どこのチームでもやっている、ごく普通の練習をやっているだけです。」（自分が教えているチームが弱かった頃（今でもそんなに強くないが）に、強いチームはどうして出来るのかとか、どんな内容の練習をしているのかと考えたりしたものだったが、自分の教えているチームが近畿でもある程度のレベルに達した今、今度は逆に、私が過去に思っていたことと同じことを他の学校の先生から、尋ねられることに大きな驚きを感じた。

これが滋賀県内の話ではなく、大阪のど真中にある大阪府立体育会館の食堂の中での話であり、会話をしているメンバー全ての人々が近畿のバスケットボール界の中心となって活躍している人たちばかりであった。

あとになって、ひょっとして、あのとき、私の受け答えの仕方がまずかったかもしれないと悔やんでいる。その後、他県の幾つかの高校の先生から「一度、練習を見学させてほしい。」と電話があったし、中には数日間、旅館に泊まり込みで放課後の練習の見学に来られた熱心な顧問の先生もいた。

<次号に続く>

会員だより



第 14 回シニアバスケットボール交歓大会 2023 In Yoyogi

高橋 旭

私が交歓大会に初めて関わったのは 2019 年 7 月の代々木青少年センターで開催された第 12 回大会からとなります。

当時は 2020 年の東京オリンピック開催を控え、多くの体育館の改修工事により、代々木第二体育館の予約が取れない状況で急遽、代々木青少年センターで開催されました。

当時は 30 歳台～40 歳台のバスケットボール大会の主催を行っており、60 歳台の大会を見るのも、況しては運営するのも初めての試みでした。

大会開催前は、色々な部分で心配事が絶えませんでした。ルールの認識のズレやプレイヤーの体調の件等皆さんのプレイを見るまでは多岐に渡って確認事項や予備プラン等を考えておりました。

ですが、大会が開催され、皆さんのプレイを見た瞬間、「基本がしっかりしているプレイ」「これからもずっと関わり続けたい」と感じました。

そこからコロナ期間を挟んで、2022 年（第 13 回）、2023 年（第 14 回）と関わらせていただきました。

4 年の歳月が過ぎ、以前は 70 歳以上の方はほぼいらっしゃらなかったのですが、今年の参加者の 4 割は 70 歳以上となりました。とても凄いことだと思い、これからもずっと続けて行きたいと思っているのと同時に今後は 80 歳以上の大会も開催できるのでは？と感じさせられました。

ここからは、2023 年（第 14 回）のことについての感想です。

今年は 11 月中旬ということで、少し肌寒い状況での開催でしたが、天候には恵まれ、日中は雨も降らず、朝晩は少し冷えますが、例年に比べると穏やかな冬と感じました。

今回の参加チーム数は例年に比べると 4 チームほど少ない開催になり、試合数も一日あたり 2 試合少ない状況でした。

そのおかげもあって試合前のアップの時間も各チームへ約 30 分程度用意することができてその点では良かったのかなと感じているとともに、皆さんからももう少し違うチームとも試合したいとチーム数の拡充を依頼されました。

運営側として、良かった点は大きな怪我や病気等がなく、試合で疲れた顔で帰宅いただけたのは幸いです。

会員だより

また、皆さんのプレイを見学してとても驚いたのは、去年よりチームとしてセットプレイ、合わせプレイが増えていたので、日頃からチーム練習をしていることが垣間見えた気がします。

また、例年通りですが、皆さん負けん気が強く、衝突することがありますが、そこは経験豊富な皆さんでしたので、レフリーのジャッジに意見することも少なく、大変助かりました。

今回、急遽70歳の試合を6分の時間止めで行いました。時間に余裕があるということと、交代等での時間浪費が60歳以上に比べ時間がかかると感じましたので、満足度を高めるために行いました。

結果、試合時間が想定の2倍かかってしまい、15日の5試合目に10分の遅れを生じてしまいました。ですが、大きくアップ時間を取っておいた状況と5試合目がスムーズに進行したので、最終の女性試合終了時間は規定通りとなりました。

女性チームは15日に2試合と過密でしたが、2試合目はお互い分析し、対応している感じが見て取れました。

16日は、70歳以上の試合が各チーム1試合あり、プラス60歳の試合もあったので、一日で計2試合に出場されていた方もいらっしゃいました。最後の2試合は少し疲労を感じましたが、ベンチワークで怪我を回避している感じがしました。

大きな混乱もなく無事に終わってホッとしています。

来年は10月31日、11月1日とハロウィン真っ只中の渋谷ですので、原宿側からの来場をお勧めいたします。来年も皆様の元気なプレイとバスケットボールで疲れた顔に会えることを楽しみにしております。

以上

JBBS
シニアバスケットボール交歓大会

2023
In Yoyogi
2nd Gymnasium

— 国立代々木競技場第二体育館 2023年(令和5年)
東京都渋谷区神南2-1-1 11月15日(水)~16日(木)
10:00~17:30

— 懇親会
〒151-8531 東京都渋谷区宇田川町24-1 高木ビル
TEL 03-3477-1199

主催 NPO法人日本バスケットボール振興会
協力 アクティブフープ

北海道バスケットボールのあけぼの

—北海道バスケットボール協会の設立—

[普及部]

1920年代（大正10年代）以降の札幌師範学校の体操科教諭の活動が、北海道の学校体育・スポーツの進展について大きな役割を果たした。「学校体育」として北海道全域にバスケットボールが普及し、北海道は、全国的に早い時期にバスケットボールが盛んになった。

1921年（大10）鳥取師範学校出身の「佐々部肇」が札幌師範学校に赴任して教諭となり、自らが部長として1922年（大11）3月に「体育同志会北海道支部」を組織し、札幌市内の教諭・訓導有志による体操の研究グループを発足させた。ここから、北海道バスケットボールの歴史が始まる。

1924年（大13）3月に「全道教員籠球大会」が開催され、これが北海道の公式試合の始まりとされる。佐々部の指導によりバスケットボールが代表「校技」のようになった札幌師範学校は、1928年（昭3）と1931年（昭6）に「全国師範籠球大会」で優勝している。

・佐々部肇 鳥取県出身 1893年生まれ

鳥取師範学校在学中、「三橋喜久雄」の指導を受け、三橋の提唱した「生命体操とデンマーク体操」を学び、1915年卒業。1917年文部省検定体操科合格、地元中学校勤務後、一時フィリピンに渡航。帰国後、九州大学桜井研究室での研修を経て、札幌師範学校に赴任。三橋が組織した「体育同志会」の「北海道支部」を結成し、北海道の体育・普及のために活動した。1926年神戸に転任、市視学などを務めた後、僧侶となった。

1926年（大15・昭元）、佐々部の転任後、佐々部の影響をうけ新しい教育法を学んだ師範学校の同僚「水間一人」が、「器具を使用した体操」を重視し、特に「競争遊戯教材」である陸上競技、バレーボール、バスケットボールなどを練習し指導に努めた。

1932年（昭7）9月25日「北海道体育協会」が設立され、水間が会長となり同年10月1日「北海道バスケットボール連盟」が発足した。（1932年（昭7）から1935年（昭10）まで会長職を務める。）

水間は、1921年（大10）から1932年（昭7）まで札幌師範学校に在籍、師範教諭としての活動は北海道全域にわたり、数多くの論文、著作を残している。札幌師範から転出後、1936年（昭11）春、雪の中で自らの命を絶った。

その後、戦前の北海道協会の会長は、1936年（昭11）の2代目から1941年（昭16）の5代目まですべて行政職である北海道庁の学務部長が務めている。

・水間一人（みずまかずと） 北海道滝川出身 1896年生まれ 1936年没

1918年札幌師範学校卒業 1921年札幌師範学校勤務・文部省検定体操科合格 1932年札幌市立高女勤務・札幌市体育研究所長

・「体育同志会北海道支部」（全道）のメンバー

町野久作（札幌）、山口英二（同）、秋江窄内（同）、照井博（帯広）、中村末雄（旭川）、高盛義雄（小樽）、相馬勝次郎（室蘭）など

・主な「札幌師範学校」の卒業生

町野久作（1917年卒業、戦前、戦後初代理事長）、中村末雄（1920）、清水清作、牧野昌次（札幌市立高女）、佐藤佐、藤沢義一（札幌高女）、上田二郎（1922）、小関肇（1923・札幌第二中学校）、その殆どが札幌師範卒業後、文部省検定中学校体操科教諭合格。戦後も小学校、中学校の教諭として活躍した。

戦前の日本協会の会報「籠球」に掲載されている「北海道のバスケットボールの活動」
「籠球 NO. 1」（1931年発行）

北海道籠球選手権大会を開催し、全道から14チームが参加し「ピクテプ」チームが「札幌二中」を破り優勝した。

「籠球 NO. 2」（1931年10月発行）

「明治神宮大会の案内」の案内は、小樽市役所内の小樽体育協会となっている。（1932年の北海道バスケットボール連盟の発足以前）

「籠球第10輯」（1934年8月発行）（北海道連盟後）

「北海道籠球連盟事業報告」1933年度（昭8）5月から11月までの活動報告と1934年度（昭9）活動の日程が記載されている。

「籠球第12輯」（1935年5月発行）

「北海道籠球連盟事業報告」北海道支部の役員名と1934年度の加盟団体16チーム名が記載されている。

「籠球第14輯」（1935年10月発行）

「北海道支部報告」全国男子中等学校競技連盟 籠球大会
札幌地方支部大会報告

北海道籠球連盟設立以前の日本協会との連絡は、「小樽体育協会」となっている。日本協会の会報「籠球」に「事業報告」「大会報告」「組織体制」などを投稿している。

1936年の春に水間が亡くなって以降、北海道籠球連盟は、組織を改め拡充し、連盟の会長は、北海道庁の学務長が務めている。「体育同志会」も消滅し、戦争による体育の統制が進められ、連盟の活動は行政が主体となって進められることになった。

「籠球」への「事業報告」「大会報告」の投稿の記録もない。

1942年（昭17）からは、連盟の活動を中止した。

1946年（昭21）に有岡勇、中西信行（北海道予科）などによって協会の新発足となった。戦後の初代会長は、地崎宇三郎（地崎工業社長1946～1947）理事長は、戦前から続けて札幌師範学校出身の町野久作が務める。

北海道は、比較的戦争被害が少なくバスケットの活動も早く復活した。その背景には、戦前からつながる師範学校出身の指導者たちが大きな役割を果たしている。

以上

〈参考資料〉

- ・1920年北海道における体育について -水間一人の体育理論を中心に- 大塚美栄子（北海道教育大学旭川分校）
- ・「バスケットボールの歩み」日本バスケットボール協会50年史
- ・戦前の日本協会の会報「籠球」

全国各地シニア大会観戦記

[普及部]

◆ 第1回エール杯岡山大会

全国スーパーゴールデンシニア・プラチナシニア大会

去る9月2日(土)3日(日)の2日間、岡山県総合グラウンド内ジップアリーナ岡山の4面を使用して65歳以上と70歳以上のシニア世代の全国大会が開催されました。



辻会長

今大会の会長辻尚志(ツジヒサシ)さんの「歓迎の言葉」をプログラムから抜粋して紹介します。

『今回、合同開催としては全国初となります第1回エール杯全国スーパーゴールデン・プラチナシニアバスケットボール岡山大会することができ、大変うれしく思うと同時に、全国からお集まりの選手ならびに関係者の皆さま、新しく参加されるチームの方々を心から歓迎いたします。「エール杯」は、選手同士が互いにエールを送りあい、また地域の皆さんからも温かいエールを送ってもらえるような大会を目指しています。

<途中、一部略>

65歳以上のスーパーゴールデンシニア、70歳以上のプラチナシニアですが、世間は前期高齢者とか、さらには後期高齢者などと呼ばれている年齢でございます。しかし我々は「元気高齢者」であり、そして光輝く「光輝高齢者」であります。そしてみんなで頑張って「高貴高齢者」と呼ばれるよう目指していき(生き)ましょう。』

この大会は、「65歳以上のスーパーゴールデンシニア」と「70歳以上のプラチナシニア」のチームが一堂に集まった画期的な大会です。もちろん「80歳以上の元気な選手」も参加しています。

辻尚志会長は、岡山県バスケットボール協会の会長、岡山赤十字病院の院長などのご要職を務めています。

バスケットボール競技が生涯スポーツとして高齢者世代に受け入れられ、交流する場としての環境(大会)を整えることは、関係者にとっても望外のことでしょう。全国のシニアバスケットボール選手が全力でプレーする「エール杯」は、岡山で来年も開催される予定です。

「懇親会」の会場では、チームの選手のみなさんの交流はもちろん、沖縄ワールドカップを大スクリーンで観戦し、日本代表チームの活躍に盛り上がりました。

岡山大会開催に際し、辻会長・関係者の皆さん本当にご苦労様でした。来年も岡山でお会いできる日を楽しみにしています。



◆ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会・函館

9月30日、第29回北海道ゴールデンシニアバスケットボール交歓大会が函館（函館アリーナ）で開催されました。地元北海道の「函館HBOクラブ」「札幌ロートルズ」「旭川ななかまど」「帯広シルバーズ」のチームに加え、「埼玉GSブルーウィンズ」（連合チーム）など、男女合わせて8チームが参加しました。4年間の空白を経て久し振りに函館に集合し、日頃の練習の成果を発揮して元気にコートを走り回りました。

この大会は、北海道の4地区が持ち回りで開催し、実に、29回、来年の札幌大会で30回を重ねることになります。選手の年齢制限が正会員（男性60歳以上・女性50歳以上）、準会員（男性55歳以上・女性45歳以上）、寿会員（男性71歳以上・女性61歳以上）であることを考えると、大会を企画した当時とは隔世の感があります。

この大会は、「大懇親会」の名のもとに各チーム（地区）が趣向（被り物などを用意）を凝らした余興を行い、最後に全員が「踊り狂う」ことが恒例でしたが、残念ながら今年は中止となりました。

今年は、懇親会場で振興会の活動内容の説明を行い、持参した「昭和11年関東大学リーグ戦風景」と「1964年東京オリンピック」の映像を流させていただきました。併せて、プラザ99号掲載予定「高校籠球ふるさと記北海道編」の原稿を各チームの会長に説明し内容についてご指摘を頂きたくお願いしました。皆さん異口同音によくここまで調べてまとめていると驚かれていました。

来年は、札幌で第30回の記念大会が開催され、いつもの「大懇親会」が実施できることを祈念し、今回の函館大会は「バスケの花」を全員で合唱して無事終了しました。



 **バスケの花** 

<p>1 (男声) 貴様と俺とはバスケの花よ 同じ想いの道に咲く 汗を流した仲ではないか 語り明かそう酒酌み交わし</p>	<p>2 (女声) あなたと私はバスケの乙女 同じ想いの夢に咲く 若きあの日の涙の虹よ も一度リングに架けよう虹を</p>
<p>3 (女声) あなたと私はバスケの絆 同じ想いの庭に咲く 今宵ひそかに瞬く星さ 情けひと夜の天の川</p>	<p>4 (混声) あなたと俺とはバスケの朋よ 離ればなれになろうとも 想いはただひとつバスケの夢を 小指からめた長月の誓い (繰り返し) 想いはただひとつバスケの夢を 胸に咲かせてまたまた逢おう</p>

以上

高校籠球ふるさと記（北海道編）

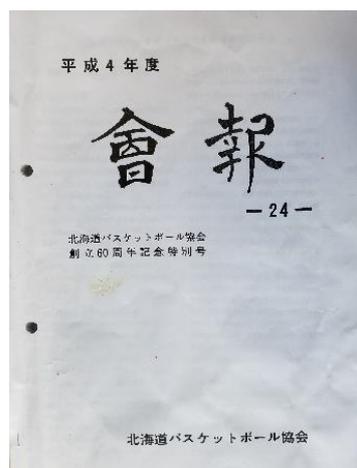
[事務局]

北海道の戦後の高校バスケットの歴史を語る場合、最初に思い浮かぶのは、黎明期ともいえる 1948 年から 52 年にかけての男女の全国レベルでの活躍である。具体的には、男子では札幌南高校（49 年迄は札幌第一高校）のインターハイ優勝 1 回、準優勝 1 回、ベスト 4 入り 1 回、国体優勝 1 回、女子では、岩見沢西高校のインターハイ準優勝 1 回。これには、北海道が戦争の被害がほとんどなく、熱心な指導者の変動も少なかったといった事情も影響しているが、戦後 46 年に有岡勇・中西信之（北大予科）、宮崎兼光（女子医専）らの努力により設立・発足した北海道バスケットボール協会の存在も忘れてはならない。

以上のような快挙を成し遂げた戦後初期の北海道の高校バスケットであるが、その背景には、戦前の昭和時代の輝かしい歴史があり、それにも触れておきたい。

具体的には、1932 年の北海道体育協会の誕生、札幌師範教諭の水間一人が会長となって発足したバスケットボール連盟、34 年の旧制旭川中学の活躍、35 年、40 年、42 年の札幌師範の活躍、38 年、39 年の函館師範の活躍、旧制札幌一中、旧制札幌高等女学校の全国選手権大会や明治神宮国民大会での目覚ましい活躍である。

このような歴史と伝統を誇る北海道のバスケットボール界であるが、本誌では 1948 年（昭和 23 年）から 1988 年（昭和 63 年）迄を対象に、その間、道内で活躍した高校や選手、コーチ・指導者、更には協会関係者にも焦点を当て、北海道の高校バスケットボール界を通観してみた。内容的には北海道バスケットボール協会会報（創立 60 周年記念特別号）の他、客観的な資料に依拠し、まとめたつもりであるが、抜けや思い違いがあるかもしれない点、読者の皆様からのご指摘をお待ちしたい。（なお、個人名は敬称略、女性は旧姓、選手の卒業校名の後の数字は西暦卒年、高校名は原則略称）



先ずは、男子であるが、大きくは 5 つの期間に分けることができる。

第一期（1948 年～54 年）

旧制札幌一中時代からの伝統を受け継ぐ札幌南（49 年以前は札幌第一）の全国レベルでの活躍が目立った時代。

インターハイ（48 年と 54 年は 2 校、49～53 年は 1 校出場）には札幌南（49 年以前は札幌第一）が 5 回出場、48 年第 1 回インターハイ（福岡国体）でベスト 8 入り、49 年第 2 回インターハイ（東京国体）で優勝、51 年第 4 回インターハイでベスト 4 入り、翌 52 年第 5 回インターハイで準優勝、同年開催の福島国体で優勝（因みに同校は 52 年度の日本協会発表ランキングで高校男子第 1 位）と輝かしい戦績を残しており、特筆、賞賛に値する。他には函館商業、函館中部（49 年以前は函館高校）が各 2 回ずつインターハイに出場している。53 年の高松国体での函館中部のベスト 8 入りも賞賛に

値する。

この時期の著名選手としては、山本治（帯広三条 53－東洋高圧－東京教育大）がいる。52年に札幌南に次ぎ、全道2位。卒業後、当時の実業団で全国的に活躍の北海道砂川にある東洋高圧に入社、四国国体に全道代表として出場、1年で退社後、55年、日本鋼管に入社の糸山選手が抜けた後の東京教育大に入学。東京教育大で、吉井監督の指導のもと、センタープレイヤーとして1年生から活躍、在学中に関東大学リーグ優勝1回、関東学生選手権優勝1回、全日本学生2位3回、全日本総合2位2回といった輝かしい戦績の立役者として活躍した。卒業後は熊谷組に就職、企業人として活躍の傍ら、同チームの日本リーグ優勝、全日本総合優勝の裏方として活躍した。

この時期、活躍した選手では、森島（室蘭清水ヶ丘 51－早稲田大）、吉岡（旭川東 51－慶応大）、坂本（札幌西 52－北大－道教員）、畑中（函館商 53－明治大－日本鋼管）、万代（函館中部 53－東京教育大）、久保（夕張南 54－東京教育大－道教員）、中川（札幌南 54－立教大）らがいる。

第二期（1955年～62年）

札幌光星の全国レベルでの実力の発揮と、女子部の活躍に刺激された形（？）で台頭してきた札幌北の活躍が目立った。

インターハイ（55年～61年までは2校、62年は3校出場）には札幌光星が6回、札幌北が4回、北見北斗が2回、深川西、江別、札幌南、札幌東、函館中部が各1回出場している。

札幌光星は58年の富山国体で準優勝を飾り、59年の東京国体、60年の熊本国体でもベスト8入りしており、これらは特筆、賞賛に値する。

更に、札幌北が56年の兵庫国体でベスト4入り、61年の秋田国体でベスト8入りしているのも賞賛に値する。

この時期、活躍した選手では、石川（室蘭清水ヶ丘 56－日体大－日体大教授）、川上（旭川工 56－東京教育大－北海道教育大函館教授）、倉島（江別 57－東京教育大－道教員・岩見沢、旭丘教諭－札幌大教授）、柴田（函館商 60－東経大）、結城（斜里 60－東洋大）、高安（帯広柏葉 61－国学院大）、山谷（名寄 61－順天堂大）、清水（義）（北見北斗 62－日体大－日体大教授）、蓬萊谷（札幌北 62－立教大）、上村（稚内 62－国士館大）、北村（函館中部 62－東京教育大）、前田（砂川南 62－順天堂大）、長谷川、大久（ともに遠軽 62－東洋大）、田村、田中（ともに札幌第一 62－亜細亜大）、山口（札幌光星 62－明治大）、清水（弘）（函館中部 63－日大－三井生命）、山田（札幌東 63－国士館大）、亀岡（名寄 63－国士館大）、丹（深川西 63－順天堂大）、松村（苫小牧東 63－明治学院大）らがいる。

第三期（1963年～71年）

第二期に続き、前半は札幌光星が全国レベルでの実力を発揮。前半の札幌旭丘と後半の旭川東の頑張りも見逃せない。インターハイ（63年～67年までと69年は3校、68、70、71年は4校出場）には札幌光星が4回、札幌旭丘と旭川東が各3回、札幌西、函館中部、北海、小樽桜陽、大野農業が各2回、夕張北、札幌商業、函館工業、旭川商業、旭川南、帯広三条、帯広柏葉、芦別工業、釧路北陽。北見柏陽が各1回出場している。

札幌光星の64年のベスト8入り、66年のベスト4入りは賞賛に値する。因みに同校は64年の新潟国体、66年の大分国体でベスト4入りしており、これも賞賛に値する。

この時期、活躍した選手では、鈴木（苫小牧東64-日大-トヨタ自工-日本協会理事）、川村（釧路湖陵64-日体大）、渡会（札幌西64-順天堂大）、奥山（斜里64-国士館大）、政二（旭川東64-東京教育大）、北向（砂川南65-順天堂大）、小久保（岩見沢東65-国士館大）、宮澤（室蘭工65-北大）、前野（苫小牧工65-日体大）、宮腰（65-日体大-住友金属）、亘理（夕張北66-日体大）、池田（北海66-日体大）、東（小樽湖陵66-芝工大）、高橋（伊達66-順天堂大）、柴田（函館南66-順天堂大）、坂本（札幌南66-北大）、舟木（網走南ヶ丘66-北大）、高橋（札幌南66-慶応大）、菊地（江差67-明治大-トヨタ自工）、宇瀬（札幌光星67-中央大）、後藤（北見柏陽67-明治学院大）、三条（小樽千秋67-東京学芸大）、田中（江差67-明治大）、田島（夕張北67-明治大）、北市（札幌南67-北大）。

続いて、鈴木（札幌光星68-中央大）、浅田（札幌光星68-法政大-日本重化）、橋本（旭川商68-中央大）、長野（斜里68-国士館大）、中川（旭川南69-名古屋トヨペット）、池田（室蘭清水ヶ丘69-亜細亜大）、越智（札幌南69-北大）、川尻（函館西70-東海大）、森（旭川東70-同志社大）、高橋（旭川東71-立教大）、錦古里（札幌光星71-法政大）、熊地（函館西71-東海大）、室谷（浦河71-順天堂大）、玉置（月寒71-順天堂大-東京女体大監督）、三国（江差72-拓殖大）、石川（室蘭清水ヶ丘72-東京経済大）、福永（美唄東72-駒沢大）、下田（伊達72-国士館大）、伊沢（美唄72-亜細亜大）、安部（静内72-日体大）らがいる。

第四期（1972年～75年）

札幌光星に加え、東海大四の活躍が目立ち始めた時代。旭川西と帯広柏葉の活躍も見逃せない。インターハイ（4校出場）には、帯広柏葉が3回、札幌光星、旭川西、東海大四が各2回、函館有斗、芦別工業、釧路北陽、釧路湖陵、釧路第一、釧路江南、帯広工業が各1回出場している。

東海大四の74年のベスト8入りは、賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、加藤伸樹（帯広柏葉74-明治大-日本鋼管：82年アジア大会日本代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、福本（大野農業73-明治大-トヨタ自工）、片岡（函館中部73-明治学院大）、横市（釧路北陽73-同志社大）、早川（夕張北73-順天堂大）、松本（倶知安73-東経大）、戸井（函館有斗73-明治大-大和証券）、川畑（旭川大付属73-大商大-住友金属）、三国（江差74-トヨタ自工）、中谷（函館中部74-防衛大）、佐藤（江別74-札幌大）、村井（帯広柏葉74-札幌大）、稲川（札幌光星74-東北学院大-三菱電機）、安達（札幌光星75-中央大）、村上（旭川西75-東京教育大-三井生命）、上田（函館有斗75-大東文化大）、今井（函館中部75-学習院大）、相馬（函館西75-東海大）、吉田（旭川西75-拓殖大）、山岸（旭川西76-拓殖大）、堀米（東海大四76-日体大）、岡安（帯広柏葉76-順天堂大）らがいる。

第五期（1976年～88年）

札幌光星と東海大四の両ライバルが圧倒的な強さを誇った時代。

インターハイ（76年と77年は4校、78年と87年は3校、それ以外は2校出場）には東海大四が12回、札幌光星が9回、釧路湖陵が2回、札幌南、札幌西、函館中部、旭川東、旭川工業、芦別、岩見沢東、帯広工業、稚内大谷が各1回出場している。東海大四の83年のベスト8入り、87年のベスト4入りは賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、西川博光（余市77-日体大-日本鉱業：バスケットでは無名校出身者であるが、大学2年時のインカレ優勝以降、頭角を現し、日本鉱業入社後、全日本代表に抜擢され、アジア選手権にも出場）、佐々木睦己（東海大四84-日体大-松下電器：87年、89年ユニバーシアード代表、91年アジア選手権日本代表-97年引退後は母校教諭、監督）、安田邦春（東海大四88-日体大-松下電器：全日本ジュニアで米国遠征、90年アジア大会、91年、93年のアジア選手権日本代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、舟木（夕張北77-小樽商大-東京海上）、佐藤（函館中部77-早稲田大）、早川（帯広北78-日大-大和証券）、奥山（帯広柏葉78-青学大）、木村（小樽北照78-札幌大-三井生命）、佐藤（東海大四78-東海大-丸紅）、渋谷（東海大四78-東海大）、佐藤（帯広柏葉78-東経大）。

続いて、斎藤（函館有斗79-明治大-大和証券）、浜下（東海大四80-東京農大）、岡本（苫小牧南81-明治大-いすゞ自動車）、佐々木（夕張北81-国士館大）、杉原（岩見沢東81-国士館大）、長田（旭川東83-慶応大）、佐藤（苫小牧東84-国学院大）、西内（東海大四84-東海大）、吉田（旭川工業専門84-豊橋技術学科大-アイシン精機）、畑中（旭川工業85-東海大）、玉田（旭川実業85-東海大）、石館（函館中部85-青学大）、武田（旭川東85-東経大）、千葉（旭川大付86-大商大-いすゞ自動車）、山根（東海大四86-東海大-マツダオート東京）、三浦（東海大四86-東海大）。

更に、石橋（札幌開成87-北海学園大-日鉱共石）、工藤（長万部87-札幌大-大和証券）、宮田（札幌光星87-中央大-日立本社）、泉（札幌光星87-日体大）、永野（東海大四87-日体大）、村本（東海大四88-東農大）、安田（東海大四88-日体大-松下電器）、細野（東海大四88-日体大-日鉱共石）、早坂（東海大四89-三菱電機）、竹内（東海大四89-近畿大-住友金属）、鎌田（東海大四89-東海大）らがいる。

次に、女子であるが、大きくは5つの期間に分けることができる。

第一期（1948年～60年）

旧制札幌高等女学校時代からの伝統を受け継ぐ札幌北（49年以前は札幌女子）の強さとこれに次ぐ岩見沢西の全国レベルでの活躍が目立った時代。

インターハイ（50年～53年までは1校、それ以外は2校出場）には札幌北（49年以前は札幌女子）が6回、岩見沢西が3回、函館大谷が2回、函館西、函館中部、札幌静修、札幌大谷、札幌南、旭川西、深川西が各1回出場している。

函館西の48年のベスト8入り、札幌北（札幌女子）の49年のベスト8入りは賞賛に値する。岩見沢西の50年の準優勝は、特筆、賞賛に値する。更に55年の神奈川県国体では札幌北がベスト4入り、58年の富山国体では函館大谷がベスト8入りしているが、これらも賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、佐野博子（札幌北 61－日体大－道教員：67 年のユニバーシアード代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、田原、坂本、皆川（ともに函館大谷－日女体短大）、榊瀉（旭川西－日女体短大）佐藤（札幌北）、辻（函館大谷－三井生命）、加藤（深川西－日立那珂）、星井（札幌北 60－東京教育大）らがいる。

第二期（1961 年～67 年）

群雄割拠の時代。そのなかでも 64 年以降の札幌静修の 4 年連続出場は、その後も続く同校の活躍を予想させるものであった。インターハイ（61、62 年は 2 校、63 年～67 年までは 3 校出場）には旭川商業と札幌静修が各 4 回、札幌北と名寄女短大付属が各 3 回、函館大谷と伊達が各 2 回、北見北斗が 1 回出場している。61 年の秋田国体で函館大谷が、64 年の新潟国体で北見北斗がベスト 8 入りしているが、これらは賞賛に値する。

この時期、活躍した選手では、一戸（札幌北 62－国学院大）、堀井（札幌南 62－国士館大）、中野（函館西 62－日女体短大）、大江（函館大谷 62－日立那珂）、佐々木（根室 63－国士館大）、志鎌（砂川北 63－国士館大）、松本（伊達 63－日女体短大）、高橋（室蘭栄 63－共立女子大）、吉本（苫小牧東 64－東女体大）、亀井（江別 65－日女体大）、石井（札幌大谷 65－日女体大）、太田（函館中部 65－東京教育大）、木下（名寄短大付属 65－日女体大）、秦野（旭川商 66－日体大）、大友（伊達 66－日体大）、磯野（札幌大谷 66－日女体大）、伊藤（伊達 67－日体大）、橋本（名寄短大付属 67－日体大）、川村（札幌東 68－日体大）らがいる。

第三期（1968 年～71 年）

札幌静修が圧倒的な強さを誇っていたが、古豪の函館西の活躍も見逃せない。

インターハイ（3 校出場）には札幌静修が 4 回連続、函館西が 3 回、江別が 2 回、旭川南、伊達、帯広大谷が各 1 回出場している。68 年の福井国体での函館大谷のベスト 8 入りは賞賛に値する。

この時期、活躍した選手では、古山（札幌静修 71－興銀）、谷口（札幌静修 72－日立戸塚）、佐々木（札幌東商 72－興銀）らがいる。

第四期（1972 年～76 年）

第三期後半からの台頭が目覚ましい札幌静修に加え、その後、同校のライバルになる札幌香蘭の台頭が始まった。第二期に活躍した旭川商業の頑張りも見逃せない。インターハイ（3 校出場）には札幌静修と旭川商業が各 4 回、札幌香蘭が 3 回、札幌開成が 2 回、江別と札幌大谷が各 1 回出場している。

札幌静修の 75 年のベスト 8 入りは、賞賛に値する。

この時期、活躍した選手では、水上（香蘭女子 73－共同石油）、小林（旭川商 75－共同石油）、高橋、斎藤（ともに札幌静修 76－共同石油）、国永（函館東 77－共同石油）らがいる。

第五期（1977年～88年）

札幌静修と札幌香蘭の両ライバルが圧倒的な強さを誇る時代。

インターハイ（77、78、87年は3校、それ以外は2校出場）には札幌静修が10回、札幌香蘭（含む88年山の手）が9回、藻岩が2回、北星学園、札幌啓北商業、三愛、旭川商業が各1回出場している。札幌香蘭の85年のベスト8入りは、賞賛に値する。

この時期の著名選手としては、大塚加奈子（札幌静修87-共同石油：共石では原田裕花や参河紀久子と同期。地味な役割に徹する研究努力型の選手で2年目にスタメンに抜擢され3年目には優秀選手賞を受賞。その努力が実って全日本メンバー入り）がいる。

この時期、活躍した選手では、田畑（札幌静修78-北海道女子短大）、古屋（札幌香蘭79-第一勧銀）、井村（北星学園79-市邨学園大）、田中（三愛79-北海道女子短大）、佐藤（札幌香蘭80-第一勧銀）、竹原（札幌香蘭80-北海道女子短大）、杉貴（札幌静修80-東京女体大）、滝沢（札幌大谷81-札幌大-日本航空）、彦沢（札幌香蘭82-筑波大）、田中（札幌静修82-共同石油）、梨木（旭川西83-日体大）。

続いて、小倉（札幌静修84-日女体大）、堀内（北星学園84-日体大）、木村（北星学園84-日体大）、柏木（釧路星園84-興銀）、穂山（小樽桜陽84-日本電気）、湯谷（札幌藻岩85-東海大）、千葉（北星学園85-日女体大）、津田（深川女子86-東海大）、清家（北星学園86-日女体大）、橘（北見北斗86-日体大）、佐藤（室蘭清水ヶ丘86-日体大）、堀岡（札幌静修86-共同石油）、吉田（札幌静修86-日体大）、土田（札幌静修86-日体大-日本航空）、野崎（札幌山の手87-第一勧銀）、中山（札幌山の手87-日本通運）、早川（札幌静修87-青山学院大）、石巻（札幌藻岩89-日体大-日本航空）らがいる。

<コーチ・指導者>

- ・石黒 英二 1949年第2回インターハイで札幌第一高校（札幌南高校）を優勝に導いた名将。
- ・阿部 昭二 1928年秋田生まれ。札幌光星高校部長兼監督、秋田師範学校卒業後、札幌光星高校に赴任。バスケットとは無縁であったが、持ち前の「ナニクソ精神」を発揮、一から学び、55年の神戸インターハイに初出場、64年の静岡インターハイではチームをベスト8、66年の秋田インターハイではベスト4に導いた名将。道協会副会長も歴任。
- ・佐藤 修 1934年生まれ。札幌南高校から北大に進学、バスケットを始め、インカレに4年連続出場。1951年卒業後、道教員として江別高校に赴任、この間北大OBチームや教員チームの現役選手としても活躍、オールジャパンや国体に出場。1954年に母校の札幌南高校に赴任、石黒監督のアシスタントを務めた。1962年に札幌開成高校に転任、1975年、76年連続して同校女子部をインターハイに出場させた名将。
- ・小沢 年博 1936年生まれ。北海道学芸大（後の北海道教育大）札幌分校卒業。札幌静修高校女子バスケットボール部を監督として長年にわたり指導。64年から88年まで、76年と84年を除き、インターハイに連続出場させ、75年にはベスト8に導き、ウインターカップにも6回出場させた名将。

- ・倉島 武徳 1938 年生まれ。江別高校から東京教育大、卒業後は道教員。翌 62 年から札幌市立旭丘高校に転任、同校バスケット部を指導、1963 年から 3 年連続同校をインターハイに出場させた名将。66 年からは札幌大を指導。89 年の北海道国体のバスケット強化委員長の重責も担う。
- ・永野 進 1942 年生まれ。函館商業から日体大、卒業後、65 年に東海大四高の監督に就任、74 年から 88 年まで、78 年を除き、インターハイに連続出場させ、74 年と 83 年にベスト 8、87 年には第 3 位に導き、ウインターカップにも 9 回出場させた名将。博子夫人も元バスケット選手でユニバーシアード代表。長男の達矢氏も札幌東商業監督というバスケット一家。
- ・上島 正光 1943 年生まれ。札幌東高校—北海学園大卒、70 年より外部コーチとして札幌山の手高校（当時は札幌香蘭女子学園高校、88 年から札幌山の手高校）バスケットボール部を 50 年以上指導。この間、2010 年にはインターハイ、国体、ウインターカップ優勝の三冠を達成。奈良岡幾子、船引まゆみ、鈴木あゆみ、本川沙奈生、町田瑠唯、長岡萌映子、東藤なな子ら日本代表選手を始め、Wリーグで活躍する多くの選手を育成・輩出している。小手先だけの指導で勝利を考えるのではなく、選手の将来を見据えた指導方針は昔から変わらない。生徒からは「鬼コーチときどきおじいちゃん」と慕われる日本の高校女子バスケットボール界を代表する名将。日本協会理事、常務理事も歴任。
- ・前野 和義 1946 年生まれ。苫小牧工業から日体大、卒業後は道教員。1973 年から旭川工業を長年にわたり指導、多くの優れた中学生が札幌に向かう中、地元企業チームの協力も得て、1983 年には同校をインターハイに出場させ、またウインターカップには強豪の東海大四高を破り、出場させた名将。

<北海道出身の指導者>

- ・畑中 悌二 1933 年函館市生まれ。函館商から明治大に進学、1 年生からレギュラーとして活躍、2 部から 1 部に上げる。卒業後は日本鋼管に就職。母校の明治大コーチ、監督として全日本学生、全日本総合にチームを優勝に導く。77 年のユニバーシアード、80 年アジア大会の日本代表監督も務めた。
- ・石川 武 1936 年室蘭市生まれ。室蘭清水ヶ丘高校から日体大に進学。1959 年に卒業後、男子コーチ、62 年からは女子コーチ、監督を務め、全日本学生選手権大会優勝 19 回。長年、関東女子学連理事長を務めた後、日本学連理事長、会長も歴任。同学教授。その後、日本協会理事・女子強化部長を務めた。更に尾崎全日本女子監督のもと、74 年には第 5 回アジア選手権、75 年の世界選手権、76 年のモントリオールオリンピックにコーチとして出場し、世界選手権ではチームを銀メダルに導いた。日本協会の副会長、専務理事も歴任。

- ・清水 義明 1943 年生まれ。北見北斗高校から日体大に進学。4 年時に主将としてチームを全日本で 3 位に導いた。66 年に卒業後は母校の助手を務め、2 年間の米国（ミシガン州立大学）留学を経て母校のコーチに就任、同学を関東学生選手権優勝 20 回、同リーグ戦優勝 24 回、そして全日本学生選手権大会優勝 14 回という輝かしい戦績に導いた。同学教授。81 年からは、日本協会からの依頼で全日本男子のヘッドコーチに就任。82 年のアジア大会では監督としてチームを銅メダルに導いた。日本学連理事長、日本協会理事も歴任。
- ・稲川 龍一 1955 年生まれ。札幌光星高校から東北学院大に進学、三菱電機に就職。学生時代、社会人時代を含め現役選手としては無名であったが、1988 年から同社バスケット部のヘッドコーチを務め、同社創部 40 年の 1996 年の全日本選手権でチームを初優勝に導いた。

<協会関係者>

- ・佐藤 修 コーチとして活躍とは別に、40 歳後半頃から、協会業務にかかわるようになり、特に 1987 年の札幌インターハイ、88 年の全日本教員選手権、89 年のはまなす国体開催の受け入れ準備とスムーズな運営に道協会理事長として中核的な役割を果たした。
- ・田口 正平 1936 年北見市生まれ。柏陽高校でバスケットを始め、中央大に進学。大学時代は、バスケットから遠ざかったが、就職した岩倉組の米国駐在時代に NBA、大学・高校のバスケットを観戦し本場のレベルを実感。その後、苫小牧協会長に担ぎ出され、1995 年には北海道協会会長に推挙された。日本協会も国際派の男子強化部長選任の必要性に迫られ、当時の小浜ヘッドコーチの推挙もあり、理事強化部長に就任。1998 年の第 13 回世界選手権に団長として参戦。

<歴代の会長・理事長>

地崎 宇三郎	会長	1946 年—47 年
町野 久作	理事長	1946 年—47 年
大和 盛一	会長	1948 年—51 年
町野 久作	理事長	1948 年—49 年
田中秀次郎	理事長	1950 年—51 年
立原 耕平	会長	1952 年—57 年
安藤 勝次郎	理事長	1952 年—57 年
石附 忠平	会長	1958 年—72 年
安藤 勝次郎	理事長	1958 年—59 年
宮崎 兼光	理事長	1960 年—72 年

中島 好雄	会長	1973年—83年
宮崎 兼光	理事長	1973年—79年
森嶋 茂夫	理事長	1980年—83年

宮崎 兼光	会長	1984年—85年
森嶋 茂夫	理事長	1984年—85年

村上 茂利	会長	1986年—88年
佐藤 修	理事長	1986年—88年

<その他>

- ・在間 弘 1925年和漢町生まれ。札幌師範卒業後、旭川商業、札幌旭丘の教諭、芦別、帯広柏葉の教頭、平取、森、札幌南陵の校長を歴任。1986年から道協会副会長、現在も現役でプレー中。2005年（平成17年）瑞宝小綬章、2011年（平成23年）度日本スポーツグランプリ受賞。

[編集後記]

今回、北海道の高校バスケットボールの歴史を通観するに際し、資料の提供や情報整理の面で北海道バスケットボール協会様には、多大なご協力を賜った。

更に、札幌南高校OBの坂本仁彦氏には資料や情報提供の面で多大なご協力を賜った。誌面を借りて謝意を表したい。

以上

事務局だより

[事務局]

- ◇ 事務所移転については、神保町近辺を第一に考え、多くの物件を見学しました。新事務所は、旧事務所から徒歩3分の距離、千代田区神田神保町2-20 新協ビル 304号室です（地下鉄「神保町駅」A4出口からは徒歩4分）。また、9月から三崎町のレンタル倉庫（JR水道橋駅近く、新事務所から3分程度）と契約をし、保管している資料を移動しました。その量の多さに驚きました。



- ◇ 11月15、16日に振興会主催のシニア交歓大会がバスケットボールのメッカ代々木第二体育館で開催され、男子6チーム、女子2チームが熱戦を繰り広げました。参加者は聖地でのプレイにはつつでしたが、主催者は高額な体育館借用料に悩まされました。高齢者スポーツの発展のため何らかの割引制度はないのでしょうか。
- ◇ 会費納入のお願い
今年度の会費を未だ納入されていない方、振興会は会員の皆さんの会費によって運営されておりますので、納入にご理解ご協力をお願い申し上げます。

振込み口座番号

ゆうちょ銀行

00100-3-316035

NPO法人日本バスケットボール振興会

三菱UFJ銀行

神保町支店 普通預金口座 1684743

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

みずほ銀行

丸の内中央支店 普通預金口座 1004687

特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

以上

プラザ こぼればなし

- ◇ 日本バスケットボール協会は、「通算4期8年まで」としていた会長任期の規定を変更していたことを、3月8日に公表した。国際バスケットボール連盟(FIBA)の役職員である場合に限り「通算7期14年まで」、に改定されていた(昨年11月に規定が変更されたが、非公表)。6月25日に臨時評議員会を開き、三屋裕子会長(64)の続投が内定、9月の役員改選で正式決定、任期は2025年9月まで。
- ◇ 1972年ミュンヘンオリンピックの得点王・谷口正朋さん(享年75)と1976年モントリオールオリンピック男子監督・吉田正彦さん(享年82)を偲ぶ「故吉田正彦・故谷口正朋とバスケットボールを語る集い」が11月18日鉄鋼会館(茅場町)で開催された。お二人の学生時代、日本鋼管チーム、日本協会など、多くの友人、知人が集まり、生前の活躍・功績を偲び歓談した。
- ◇ 2023年は日本のバスケットボール界にとって歴史に残る年であったかもしれない。アジア大陸のパリオリンピック代表権を獲得した男子日本代表チームの活躍や、アジア大会決勝で中国と競り合った女子日本代表チームの活躍が契機となり、多くの選手が民放TVの番組に出演し、その活躍が話題となった。
- ◇ シニア世代の大会が全国各地で盛んに開催されている。地元開催関係者の悩みの一番は、体育館の確保。多くの選手は、懇親と観光も楽しみにしている。今後は、各地の大会開催日程の事前調整も必要となってくるだろう。
- ◇ 2月22日シャンソン化粧品7選手らが「方向性の違い」により退団し、李HCは、シーズン途中の大量退団で「混乱を招いた」ために引責辞任した。4月12日Wリーグは、調査を行っていると発表。シーズン中の異常事態に対する説明不足などを理由にコンプライアンス委員会の弁護士らによる当該選手への聞き取りを実施。9月25日にWリーグは、シャンソン化粧品に7段階で最も軽い譴責処分を科した。開幕リーグ戦には通常通り出場できる。「戦術の方向性の違い」から、昨年12月チーム内に対立が生まれ通常の練習が行えない状態に。数日後、幹部が一部選手に解雇を含む処分の可能性を伝えた。調査チームは、幹部の発言や周囲の対応について、「適切なマネジメントを怠っていた」と判断した。
- ◇ 第90回皇后杯で栃木県代表の白鷗大学が11月末の2次ラウンドでWJBLのチームを連破してベスト8に残り、12月13日からのファイナルラウンドでENEOSサンフラワーズと対戦する。この間、白鷗大学は女子インカレ(第75回全日本大学バスケットボール選手権大会)に参戦、国立代々木競技場第二体育館に第1シードで出場し、他チームを圧倒して12月10日に優勝した。その余勢を駆って同じ代々木第二体育館でENEOSに立ち向かう。応援して結果を見守りたい。

以上

NPO法人
日本バスケットボール振興会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町2-20
新協ビル 304号室
電話/FAX (03) 5276-5801
メール contact@jbbs.jp
